
ESCAPE Good Bye White Bird

騎晶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ESCAPE Good Bye White Bird

【Nコード】

N4940L

【作者名】

騎晶

【あらすじ】

秘密結社クロノスの命令により、南米の某国の独裁者アル＝コルテカ大統領を暗殺した、トレインとエミリオ。

無事に任務を完了させたその後、トレインはある男の暗殺を命じられる。

その男は麻薬組織スコープオのガンマンだった『イーグルアイ』アントニオ。ある事情からイーグルアイのボスを殺し、女と組織を抜け、アメリカへ亡命しようとしていた。

トレインは彼を殺そうとしたが、スコープオの幹部『バイソン・ホ

ーン』カルロスが率いる殺し屋達の襲撃に殺すはずのアントニー達を逆に助けてしまう。

身ごもった女と、兄貴と自分を慕ってくるアントニーを殺す事はできず、

トレインもクロノスを裏切る事になった。

組織の束縛から逃げる三人に次々に現れるスコープオの刺客達

裏切り者の抹殺と秘密保持の為、クロノスの放った牙をむく二匹の黒い犬：

銃弾の雨は鳴り止むことなく、彼らは銃を手に進んでゆく。

自由な鳥ならばこの檻から大空を飛んで逃げることもできるだろう

が、地を這う人間は翼どころか羽の一枚を持たない。

政治に薬に、金と義理、男と女：

すべてを巻き込み事態はやがて終焉を迎える。

前編（前書き）

ジャンプで連載していたBLACK CATの二次小説ですが、現実社会が舞台になっており、キャラクターの性質や性格、舞台背景に違いがあります。

前編

白い鳥が青い空に羽ばたいてゆく。

鳥は自由だ。

彼らには国境はない。

行きたい場所に飛んでいける翼を持ち、風に乗ってどこにでもいける。

地を這うものたちは皆、彼らを羨ましげに見つめるだけ…

きっと、鳥は地上に縛り付けられた者達の不自由さなど、知る事は無いだろう。

知らないからこそ、きつと頭の上で彼らの事を見下している。

次はどこに行こう、どこで眠ろう、何を食べよう。

青い空は自由がある、しかし、地上に縛り付けられた者達にはそこにいく事は、できはしない…

トレインは迷彩服を着た図体がでかい男の胸板に次々にマグナムをぶち込んでいった。

男の体が地面に崩れるよりも早く、後ろに跳躍してその場を離れる。トレインがいたその場所に乱射される銃弾が撃ち込まれてゆく。

すばやく動くトレインの背中を追い詰めるように、次々に銃弾がコンクリートの壁を砕いていった。

「クソ、ちよこまかと逃げやがって、なんてすばしっこい野郎…、くげっ」

アサルトライフルを連射する男の眉間をマグナムが貫いた。

「な…、なんなんだよ、こいつら、警察か、軍か？」

男達の一人が青ざめた顔で仲間の顔を見る。

こうしている間に、仲間がまた、一人、二人死んでゆく。

馬鹿な、自分達は、東ドイツが薬物投与により作り上げた常人の5倍の筋力と、運動能力を持つ強化兵士、潜在能力も戦場経験も、世

界中の部隊の隊員達に負けるとは思えない、むしろ自分達こそ最強の兵士だと思っていたのに、突然現れた二人の黒服の男達の前ではまるで、なけなしの金で買ったエアガンもって戦争ごっこしている近所のガキどもと変わらない。

はつきりいつて相手が強すぎるのだ。

「わからん、軍はずがない、警察？笑わせるな」

大佐はそり上げた頭を真っ赤にし、だらだらと汗を流しながら息を荒げて呟いた。

「我々は、今は亡き、祖国、東ドイツが生んだ地上最強の軍人だ、ステロイド剤の投与もトレーニングも経験もそう言い切れるほどの量を積んでいる、他の軍やまして警察なんぞに、しかも、たった二人に負けるはずがない」

次の瞬間、大佐の頭が炎を噴出して飛んできた鉄球によって粉みじんに吹き飛んだ。

脳味噌や肉片があたりに散らばり、残された胴体からは盛大に血飛沫を吹き上げる。

「た、大佐ああ！？」

大佐の返り血を浴びた男はまるで覚めない悪夢を見ているようだった。

もう、残されているのは自分だけのようだ。

最初、20人いた仲間達はすでに先に逝ってしまった。

男は蒼白しながらサブマシンガンを構える。

右には化け物みたいにでかい銃を持った男が、左にはジャラジャラ鎖を鳴らしながらブースター付きの鉄球のような武器を持った男がこちらに向って歩いてくる。

『死ぬ』

今ここで…自分は死ぬ

兵士としての本能がそう告げる。

だが、今ここで死ぬわけにはいかない。

娘が、白血病の娘が病院で自分の帰りを待っている。

娘の病の治療には今の自分の収入では間に合わないくらいの金が必要だ。

軍時代の大佐にそそのかされたのも、まとまった金が入る仕事だと言われたからだ。

自分の罪が許されるとは言わないが、娘には罪はない。

一人残すわけにはいかない。

だからどれだけ人でなしと罵られようとも、浅ましいといわれようとも、なんとしても娘のためにここは生き延びなければならぬのだ。

「うおおおおおおお！」

覚悟を決めた男は吼え、引き金を引く。

しかし、トレインがハーデイスの引き金を引くほうが早かった。

ハーデイスの銃口から放たれた一発の銃弾が男の胸に撃ち込まれ、倒れ伏す。

「遅エよ」

トレインはそう呟き、シリンダーから空薬莖を捨てると、すばやく新しい弾薬を詰め込む。

銃を掴もうとする男の手を踏みつけると、リロードし終わったハーデイスの劇鉄を起こした。

そのまま、銃口を男の眉間に押し付ける……

「た……たすけてくれ」

肺に穴が開いているのだろう。

ひゅーひゅーと空気が漏れる声で男はトレインに命乞いしてきた。

「頼……む、医者……を……連れてきて、俺は帰……らなきゃ、ゴホゴホ」

「……あんだだって、覚悟して事を起こしたんだろうが、お前らが殺した連中が命乞いしなかつたというのか？」

「た、大佐に、だ、騙された、んだ、俺は、こんな事になるとは……、た、頼む、苦しい、うちには、病気の娘がいる……んだ、かえらなきゃ」

娘……

そんなのがいるんならハナからこんな事するんじゃない

トレインは舌打ちをした。

彼に撃ち込んだ銃弾は44マグナム

本来は熊を仕留める為の弾だ。

それで肺を撃ち抜かれて、助かるとは思えない。

だが…

トレインは銃をホルスターに納めた。

「…今から、医者を呼んできてやる、だが、そこからは賭けだ、あなたの生命力次第になる」

彼らは東ドイツの強化兵

ドーピングによって得られたその並外れた筋力と生命力ならば、医師の腕と処置の方法によれば生き延びる可能性だってきつとあるはずだ。

その言葉を兵士は血を吐きながら微笑んだ。

「ありが…と…う」

その言葉が言い終わるか言い終わらないかの瞬間、彼の頭を振り下ろされた鉄球が叩き潰した。

「バルドルっ！」

トレインは憎悪の籠った瞳で鉄球使いのバルドルを睨みつけた。

「何で、殺さねえんだ、あ？」

「俺達の任務はあくまで、このビルを占拠した敵の『鎮圧』であり、

『抹殺』じゃねえ、奴はもはやほとんど虫の息、医者に診せたって助かるかどうかわからない状態だった、止めを刺す必要すらなかったらうが」

「ハッ、お前、聖人君子にでもなったつもりか？まさか、娘がいるなんて与太話を真に受けてやがるのか？禍根を残して生かしておけば、必ず、再び俺達の前に現れて殺しあう事になる、無駄なことだ」
バルドルは口に入れていた味のなくなつたガムを吐き捨てる。

「…女子供は殺さないのがお前のやり方だったが、百歩譲ってそれは理解してやるぜ、だがよオ、こいつらは別だ、見る、こいつら

に殺された奴らの惨めな姿を、女は犯し、男はわざと苦しむように腹に鉛ぶち込んで殺してやがる、お前はそんな奴らの仲間に娘がいるなんて理由で同情してやがるのか？だったら」

トレインを見下ながら、皮肉を込めた笑みを浮かべた。

「そいつは、甘いを通り越して偽善だぜ」

ハハハハハハハハハ、バルドルの高笑いが廃墟と化したビルに響く。

「笑うなよ、駄犬、腹に風穴開けて犬らしく床の上に這わせてやるうか」

「なんだと？そいつは聞き捨てならねえな、だが丁度いい、おめでたいてめえの脳味噌、叩き出して、何色かどうか見てみたいと思っ
てたんだぜ」

二人の影が同時にそれぞれの武器を構える。

彼らの間に凄まじい殺気が膨れ上がり、破裂寸前だった。

「???トレイン」ハートネットと??バルドリアス」S」ファンギ
ー二

この二人は水と油、黒い猫と黒い犬、その道はけして交わる事は無いのだ。

それから数週間がたった、南米の某国のホテルの前に黒塗りのリムジンと、軍用のジープが止まる。

リムジンから黒服の男達が警戒しながら降りてきた。

その後で、要人らしい恰幅のいい男が降りてくる。

「お気をつけて、コルテカ大統領、暗殺者が狙っているという情報が入っていますので」

「わかっている、だが、この国の大統領たる俺が、ビクビクしていれば国民を不安にさせるだけだ、その為に、この場所を狙撃可能な場所には軍のスナイパーを配備し、近づいてくる奴らは容赦なくぶち抜くようにしているんだろ？そして、俺の周りにはお前達SPと軍の兵隊が守りを固めている、誰が見たって暗殺は不可能だぜ、も

つと気楽にいこうぜ、おう」

コルテカ大統領は葉巻を啜えりと、傲岸不遜に声を上げて笑う。

「はあ」

コルテカ大統領はそう言うがSP達は心配だった。

大航海時代より長い間、この国はスペインの植民地だった。

近代に入り、植民地という呪縛から解放されたが、アメリカやヨーロッパという外資系の企業がこの国の経済を支配し、国民の多くは安い賃金で働かされるしかないという、植民地時代と変わらない生活を送っている。

この国は古くからヘロインの原料となるコカの葉を医薬品や食料として栽培してきた。

コカは濃縮し精製すればヘロインとなるが、そのままの状態で料理や茶の葉として使用してもなんら問題がない。

コカ畑を営んでいる農家は数多く存在し、この国の文化や生活にはコカの葉は欠かすことができない。

だが、外資系企業に仕事を奪われ、仕事を失った人々は、生きてゆくために本来の使用法から逸脱し、コカの葉からヘロインを作り売り出す事を覚えてしまった。

海外の組織は純度の高いこの国のヘロインを高く買い取ってくれるやがて彼らはコカを効率よく栽培し、販売するために徒党を組み、各地で多くの麻薬組織が生まれた。

いまや、この国では、貧しい若者達は生涯を外資系の企業に安い賃金で雇われて奴隷として牛馬の如く働かされるか、麻薬組織の一員として薬を売りさばくかのどちらかしか残されていなかった。

そして、組織間での抗争に巻き込まれ年間、何人もの若者達の命が凶弾により奪われてゆく現実がある。

アル＝コルテカはそんな状況からこの国を救う救世主だった。

かの有名な、串刺し公が就任と同時に裏切り者達を一斉に串刺しにし処刑したように、

彼は大統領に就任するや否や、外資系企業を一斉に国外に追放した。

その事により、何百年も外国人達に押しつぶされるような人々の生活に活気が戻ってきた。

この国は経済的に豊かさを取り戻しつつある。

だが、追い出された企業の国々は大統領のやり方が気に喰わない。麻薬国家だの世界の敵だの罵った拳句、経済制裁として物資の輸入を断ってしまった。

しかし、アル・コルテカはそんな事には動じなかった。

独自の輸入ルートを確立し、経済制裁後も何も変わらなかったとはいえないが、それなりの経済の水準をキープし続けたのだ。

すぐに根を上げて泣きついてくると思っていたものだから、他国の連中はさらに腹を立て、アル・コルテカに更なる手段を下すことにした。

『暗殺』しかないと

そして性質の悪い事にあの秘密結社まで動き出したというのだ。

S Pも噂でしか聞いた事がないし、眉唾な話だと思っただが、古くより世界経済を牛耳り、世界を裏側から操ってきた組織が存在しているという。

アル・コルテカもその組織からも命を狙われているとアメリカに派遣した諜報部員からの報告を受けたのだ。

信じられない話だが、アル・コルテカは今年に入って三度も命を狙われている身だ。

本人は嫌がるが石橋を叩いて渡るくらい、過剰すぎる警戒で彼の身の安全を守っているのはけして、おかしい話ではないはずだ。

実際、この遠距離からのスナイパーの防衛と、近距離からのS Pと陸軍の合同防衛により、三度とも暗殺者を射殺して事なきを得ている。

今日はこのホテルに宿泊し、明日は国際ホールにて開かれる国連会議に出席するのだ。

ホテルもホールも万全の警備体制を取っているのも、もし、暗殺者が狙うとするならば、その移動の間を狙ってくるに決まっている。

「狙撃班、異常はないか？」

はい、ホテル周辺のビルには我々の他、スナイパーはいません
「警備B班、周辺に異常はないか？」

はい、交通規制を行っているホテル半径1km周辺に不審者や
不審な車両はありません、問題無しです

「了解」

無線を切る。

「大統領、ではホテルに向いましょうか」

「目の前を移動するだけだぞ、いつもいつも、大げさすぎる」

「お許しを、大統領の身を案じての事ですので」

フン、大統領は不満そうに鼻を鳴らすとSPに囲まれるようにして
ホテルに向っていく。

「なんだ、あいつは？」

SPの瞳にホテルの向かいの道路に立つ黒いコートの男の姿が映っ
た。

不審者だ、現在ホテル周辺には交通規制が引かれており一般市民が
出歩いたりすることなどできないのだ。

「…おい」

次の瞬間、静かな町に銃声が鳴り響いた。

大統領の体が崩れ落ちる。

「だ…大統領？」

大統領は心臓を一発で撃ち抜かれており、既に絶命していた。
件の男はコートを翻して走り出す。

大統領はSPが楯になって護送していた。

奴から大統領までは200メートル以上、距離が離れている。

まさか、あの位置から発砲、しかも、楯となるSP達の間を縫って
大統領の心臓を貫いたというのか？

人間業ではない。

「奴を追えッ！」

SP達は銃を抜き放ち追いかける。

陸軍の軍人達はジープのアクセルを全快に踏みつけて男の背中を追いかける。

「狙撃班、何をやっているんだ、どこを見張っていた」

S Pの一人が無線で狙撃班達を怒鳴りつけるが…、返事が返ってこない。

「応答しろ、応答しやがれ！」

応答などできるはずがない。

ビルの上で敵のスナイパーや大統領の周囲を見張っていたスナイパー、8名は銀色の矢に頭や心臓を貫かれて死んでいたのだ。

黒いコートの男は跳躍し、壁を蹴って建物の屋根へと逃亡する。

「なっ、猫のように身軽な野郎だ」

「ライフルで撃ち落しましょう」

ジープに乗った軍人はライフルで屋根の上を駆けるトレインの背中を狙いつける。

ズキヤツ！

ジープの天井を突き破って3本の矢が運転手の体に刺さっていた。

「なにいつ」

運転手を失ったジープが暴走し、民家の塀にぶつかった。

S P達は他の警備班を招集し、トレインの行方を追ったが建物の屋根と屋根を飛び移り駆け抜ける彼を追い詰める事ができず、ついには彼を見失ってしまった。

コルテカを殺しS P達の追跡を首尾よくまいたトレインはアメリカの大使館へと逃げ込んだ。

大使館の中は治外法権であり、警察はここまでは追ってこられないのだ。

ガチャ

ドアノブが回り、眼鏡を掛けた黒いスーツの青年が入ってきた。

「やあ、君も無事だったようだね」

「エミリオ」

眼鏡の青年の名前はエミリオ＝ロウ

知的で穏やかな風貌をした男だが、特務部隊クロノ・ナンバーズの？を務めている。

武器はオリハルコン製の弓『アルテミス』
得意とするのは遠方からの精密射撃。

何しろ、この男、弓矢を使ってスナイパーライフルと同等の精密射撃が行えるという、冗談のような事をする。

以前、一度、スナイパーライフルを持ったトレインと狙撃を競い合った事があったが、結局、エミリオの方に軍配が上がった。

クロノ・ナンバーズのスナイパー、彼にはその名前がふさわしい。

「まだ、警察はこのあたりを張っているのか？」

「いや、僕の見たとこ、彼らは引き上げて言ったようだよ、大使館側が暗殺者は居ないと言った以上、確たる証拠もなく踏み込んでくる真似はできるはずがないからね」

エミリオは冷蔵庫から缶コーヒーを取り出そうとしたが、手を止める。

冷蔵庫の中に入っているコーヒーはすべて微糖だったのだ。

「ちっ、冷たいコーヒーが飲みたかったんだけどな」

「あんだ、微糖は駄目なのか？」

「ああ、口の中に残るあの甘さが苦手だね、仕方ない、誰かに頼んで買ってきてもらうことにするか」

エミリオはそういうと、冷蔵庫の中からミネラルウォーターのペットボトルを取り出した。

「ミルクにすりゃいいのに」

「嫌いじゃないけど、今は水」

「チッ」

トレインは舌打ちをした。

エミリオはペットボトルの蓋を取るとそのまま水を喉の奥へと流しこんでゆく。

「しっかしなあ……」

「……なんだか今回の件、君は最初から不服そうだったね」

「不服つてわけじゃねえけどなあ」

トレインはボサボサの頭を掻きむしる。

「君の言いたい事はわかるよ、確かにあの大統領は独裁者ではあったが、この国の発展の要となる人物だった、殺していい人物かは疑問に残る」

「…この国に存在していた外資系企業を追い出したことは確かに、クロノスにとってはマイナスだ、そいつらの中には組織の息が掛かったところも多い、だが、この国の人間にとっては今まで自分たちを支配してきた連中から解放されて、ようやく自分達のやり方で国を盛り上げていけるようになったんだぜ、俺には縁もゆかりもないこの国のことなど関係がねえ、だが、どう考えても筋が通らねえ」

「暗殺なんて手段で筋が通る事なんて少ないよ、すべては幹部や長老達の決定、そんな事を僕達が考える必要はないんだ、所詮、僕達は単なる殺人装置に過ぎない」

「あんたは、それでいいのかよ」

「いいんだ、あまり殺す相手の事に深い入りするな、やりにくくなるし、判断が鈍れば死ぬのは僕達だ、それにあの男はこの国でドラックを合法化しようとしていた、薬の使用、精製、売買を合法にし、国のビジネスとして海外に売りさばこうとしていたんだ、殺されたって文句は言えないよ」

「確かにな」

トレインは口元を吊り上げて笑った。

「ところで、君はこの後、どうする？また別の任務かい？」

「しばらく休暇の予定だ」

「いいな、僕なんてこれからすぐに中東だよ、それでどこか旅行にでも行くのかい？」

「さあな、ただ家でのんびりするさ」

「君らしい意見だ、いい休暇を過ごせる事を祈っているよ」

トレインの携帯電話が鳴り響く。

「…はい」

「ハートネット、任務遂行ご苦労」

電話の向こうから威厳に満ちた男の声が聞こえてくる。

声の主はベルゼー・ロシユフォール

特務部隊クロノ・ナンバーズの？で、隊長の補佐役を務めている。

彼らにとつては直属の上司に当たる人物だった。

「急な事ですまないが、一仕事頼まれて欲しい、速やかにある人物を抹殺してくれ」

砂の混じった風が吹きつけ風転草タンブルウイードが砂漠地帯に転がってゆく。

サボテンが生え、馬小屋から馬の鳴き声と糞尿の臭いが漂ってくる。まるで西部劇さながらの光景だ。

国道沿いに村にただ一つある酒場からギターの音が流れてきた。

酒場『コンキスタドル』にはそれなりに客達が集まっていた。

この酒場に集まってくるのは、アメリカに亡命をしようとしている者達だ。

国境沿いのこの砂漠さえ超える事ができれば自由の国アメリカに行き着くことができるが、多くの者達は砂漠を超える事ができず、あつる者はフェンスを登っている最中に国境警備隊員に捕まったり、撃ち殺されたり、運良く国境を越えられても砂漠地帯の焼け付く日差しに焼かれて死んでしまう者達も多い。

それでも彼らは自由の国を目指す。

どうしようもない貧しさがそうさせるのか、アメリカンドリームという甘い幻想に憧れているのか、彼らはアメリカを目指すために過酷なこの砂漠を越えようと命を懸ける。

しかし、命懸けでこの砂漠を抜けてアメリカにたどり着いても、体よく安い給料で働かされ貧困という蟻地獄から抜け出せないまま、多くのものは再びこの国に強制送還されることになるのだ。

自由の国、所詮それはもはや砂漠が見せる一種の蜃気楼に過ぎない。酒場のステージの上で男はギターを弾いていた。

歳は30前後

褐色肌のやや痩せ身の男で、古いフォークギターで曲を奏でている。その曲は民謡音楽なのだろうか、優しく温かな、聞いた事のないのどこかで聞いた覚えがあるような、それはそれは懐かしく感じる曲だった。

客達は皆、その曲に聞き惚れ、テキーラを呑むのも、相手に因縁つけて喧嘩するのもその時ばかりは忘れていた。

中には故郷に残してきた家族を思い出し涙さえ流している人々もいる。

ポロン…

曲が終わった。

曲が終わった途端、一斉に拍手喝さい。

男は笑いながら頭を下げる。

「ありがとう、皆ありがとう」

「兄ちゃん、それはなんて曲だい」

農夫らしい男が訪ねる。

「ああ」

彼は少し照れたように目を伏せた。

「俺が作った曲さ、曲名は『最愛の人クレシア』」

「アントニー」

彼のそばにこげウエーブの掛かった茶色の髪を長く伸ばした女性が駆け寄り、彼を抱きしめキスをした。

その瞬間、さらに拍手は津波のように盛り上がり、各場所でピーピーと口笛が飛ばされた。

「なんだ、自分の上さんの歌かよ、そりゃあ、そんな美人を想って弾けば、思わず聞き惚れちまうようないい曲ができるわけだ」

「まあ…」

「あんた達も、アメリカに渡る気かい？」

「ええ、この国ではなかなか仕事にありつけなくて」

「…そうか、確かに、経済制裁の最中だ、また、今月になって厳しくなってきたやがったもんな、だが、アメリカに逃げても移民にや厳

しいし、ろくな仕事にありつけないぜ」

「それは…、わかっています」

「おや」

農夫はクレシアの腹が不自然に膨れ上がっているのに気づき、にんまりと笑みを浮かべる。

「上さんの腹に赤ん坊がいるんだな、こりゃ生まれてくる子供も安心だな、こんなに愛し合っているパパとママがいるんだもんな」

アントニーとクレシアはお互いを見詰め合って微笑んだ。

「俺達二人が生きていれば、生きてこそいれば、どこでも生きる道は作れると俺は信じているんです、だから、死ぬ気で、向こうで働いて生まれた子供に何の心配もさせません」

そういつて、二人は手をぎゅっとつないだ。

お捻りを客達からもらった後、二人は席についた。

席に着いた二人はキヨロキヨロとあたりを見回す。

そして危険ないと判断するとアントニーはクレシアの耳元に顔を近づけた。

「偽造パスポートが明日、手に入る」

アントニーは囁いた。

「明日の今日は車で堂々とアメリカに入れる」

「でも大丈夫なの？その偽造屋は信頼できるの？」

「奴は多少金にガメツイがプロ、金を払っている間は安心だ」

「そう、それなら良かったわ、ねえ」

アントニーの頬をクレシアは愛しげに撫でた。

その薬指にはダイヤモンドの指輪が嵌められている。

二人で組織から抜け出すあの夜に、アントニーがクレシアに送ったものだった。

「私、心配よ、あなたが『スコープイオ』の連中に殺されるんじゃないかと」

「大丈夫、俺は死なない」

アントニーはニコツと太陽のように歯を見せて笑った。

「俺はお前のためにも、お腹の子の為にも生きてやるさ、約束だぜ」
「アントニー、愛してるわ」

「俺もさ、クレシア、一緒にアメリカで幸せに暮らそう」
二人は手を重ね合わせると唇を重ねた。

二人が熱いキスをしている時にアントニーの前に一杯のテキーラ、
クレシアの前にはミルクが置かれた。

アントニーはクレシアの唇から唇を離すとウェイトレスに尋ねた。

「こいつは？俺、注文してないけど…」

「あ、そちらのお客さんからです」

年齢を誤魔化して働いてそうなくらい、若いウェイターは店の隅で
一人、飲んでいた男を指差した。

20代前半ぐらいの中肉中背の若い男で、黒いコートに身を包んで
いる。

アントニーはテキーラを掴むと、男に向かって歩いていった。

「よう、いい酒をありがとうな」

「気にするな、あまりにもいい曲だったから、そのチップ代わりに
奢らせてもらった、嫁さんの方はミルクにしておいた、ガキがいる
のに酒はよくないと思ってな」

「そいつは気遣いありがとう、俺の名は、アントニー、流しのギタ
リストをしている」

「俺はトレイン」ハートネット、猫さ」

「そうか、気があうね、俺も猫さ」

男は屈託のない笑顔を向けながら男は握手を求めてきた。

トレインはその手を握った。

そして痩せ身の体に似合わない握力をしていることに驚く。

アントニーはトレインの手を離さない。

そればかりかさらに力を込めて握ってくる。

握りつぶす気か？

トレインは心の中で舌打ちをした。

「あんた、何で、酒場に来て酒を飲まずにミルクを飲んでいるんだ

「？」

「…俺が下戸だからだ、飲むと吐く」

「面白い奴だ、じゃあ何故、酒場になんて来る」

トレインはアントニーの腕を机の角に叩きつけて無理やり彼の手を引き離す。

互いの手が離れた瞬間、二人は同時に拳銃をお互いの頭に突きつけ合っていた。

「てめえ、『スコピオ』の追っ手か？」

「違うね、ただの黒い猫さ」

二人は同時に体を離す。

入り口から入ってきた男達が機関銃を乱射してきたのだ。

突然、鉛の雨にさらされて客達が悲鳴を上げる。

被弾した客は地面で苦しげにジタバタのた打ち回る。

まさに『コンキスタドル』は阿鼻叫喚の地獄と化していた。

「くっ」

「アントニー！」

「来るな、伏せている、クレシア」

アントニーは左肩を負傷したらしい。

白いジャケットが赤く血でにじんでいた。

アントニーは苦痛に顔を歪ませながら抜き放った拳銃を撃ち、応戦する。

アントニーが撃つ、ルガーK P 9 0 D C から放たれた4 5 A C P 弾が男達の一人の心臓を貫いた。

さらにその隣にいた奴の体に銃弾を撃ち込み、貫通した銃弾がその後ろにいた男の腕を貫く。

「さすがだな、『イーグルアイ』アントニオ、生涯、エル・グラン
トが気に入っていたわけだ」

ウージーを持った数名の男達に囲まれて、帽子を被った髭面の男が店内に入ってきた。

体系はやや、肥満体質、大きく育った腹を揺らして部下達の前に立

った。

手を上げて部下達に攻撃の制止命令を下す。

「ちつ、『バイソン・ホーン』カルロス、『スコープオ』の幹部様のお出ましかよ」

「久しぶりだな、そしてよくもやってくれたもんだ、よくもエル・グラントを、親^{ボス}を殺してくれたもんだ」

カルロスはヤニ臭いため息をついた。

「お前はボスのお気に入りだった。子供の頃から実子同然に世話になつておきながら…、女のために親を殺すとは、お前はどっしよももないクソ野郎だぜ、救えねえ」

「黙れ！」

アントニーは怒鳴った。

「てめえに何がわかる、お前こそ、親父が死んだ途端、奴らに尻尾を振つて、『スコープオ』をてめえのものにしようとしてやがる、豚野郎！てめえも裏切り者だ！」

ズドン！

アントニーの頭を弾丸がかすめた。

カルロスの手には大口径のリボルバー、トーラスレイジングブルが硝煙を上げていた。

「黙れよ、この蛆虫野郎、てめえごときが、この俺を批判する資格があるのか？あるって言うのかよ、エル・グラント亡き今、俺は組織を受け継ぎ、更なる発展をもたらす、女に狂い、親を殺し、組織を抜けたお前に俺の野心を批判する事など耳クソ程度もできるはずがない、アントニオよ、この世は守らなきゃいけない事ばかりだ」

カルロスは銃の劇鉄を起こした。

それを合図に彼の部下達は各々の銃を構える。

「親父への義理、組織の掟…、だから、俺は渡世の筋を通す、お前を撃つてな、それで終わりにしよう」

「待って！」

クレシアはアントニーをかばうように彼らの間に立ちふさがった

「私のお腹の中には赤ちゃんがいるわ、この子を親無しにはしたくない、ねえ、どうか、命だけは、この人の命だけは助けて、何でもするわ、私達にできる事なら」

「ククク、何でもする、女に一度は言われてみてえ事だが…、この売女」

カルロス は 下卑た笑みを浮かべる。

「赤ん坊がそいつの子供と言っていたが、本当にそうなのかな？」 その言葉にクレシアは唇を噛んだ。

アントニーは顔を真っ赤にしながらカルロスを睨みつける。

「カルロス、てめええええええええ！」

「もういい、考えるまでもねえことなんだぜ、めんどくせえ、邪魔するなら、女も纏めて鉛をぶち込んでしまえ」

カルロス達が銃の引き金に指を掛けた瞬間だった。

テーブルの下に伏せていたトレインがカルロス達に筒型の何かを投げつけた。

まさか手榴弾？

カルロス達の動きが凍りつく。

次の瞬間、手榴弾が破裂し強烈な光と爆音が鳴り響いた。

「しまった！スタングレネードか！」

カルロス達は光と爆音に数分、身動きが取れなくなってしまった。

目がなれてきた頃には、もう、あの二人の姿もどこにもないし、あのスタングレネードを投げつけた黒いコートの男の姿ももう、どこにもなかった。

トレインは屋上で星を見ながらマルボロを一服していた。

煙草の紫煙が雲ひとつない夜空に上がってゆく。

田舎だ、星空はいつも見ている都会の星空よりも幾千倍も美しかった。

そいつは、甘いを通り越して偽善だぜ

数週間前のバルドルの言葉と哄笑が脳裏に再び響いてくる。

「ちっ」

トレインは舌打ちをするとコーラの空き缶を蹴った。

何で、あの二人を、ターゲットの命を助けてしまった？

自問自答を繰り返す。

理由は一つ。

妊婦のあの女が身を挺してターゲットの命を助けたからだ。

トレインは力が無い女子供がこんな薄汚い世界の犠牲になって殺されることはおかしいと思っていた。

それは自分自身が殺し屋に父と母を殺され、殺し屋としての生き方を選ばざるおえなかったという経験からでもある。

だから、女子供を手を掛けたことは一度も無い。

だが、そのことさえ、甘いといわれるのは仕方がないし、もっともな事だと頭では理解している。

殺し屋としてバルドル達は何一つ間違っではない、自分のこの行為は自己満足の偽善に過ぎない。

親を殺されて此岸にただ一人残されても、悲しいだけなのだから…、親と一緒に彼岸に送ってやる方が幸せかもしれない。

世界はそれほど優しくは無い。

もしかしたら、親を失ったその子供は生きるために体を売るかもしれない、盗みを働くかもしれない、…黒い猫のように殺し屋になるかもしれない。

それでも死ぬよりは生きていたほうがいい、トレインはそう信じている。

ザギーネもまた、そう信じていた。

だからこそ、あの時まだ子供だった自分を生かし、殺し屋として育て上げたのだ。

トレインは深く煙草の煙を吸い込み、ため息として吐き出した。

殺すどころか自分にはあの妊婦を、その夫を見殺しになんてできなかった。

だが、どうする？

殺さなければクロノスを裏切る事になる。

セフィリアは許さない。

ナンバース全員を敵に回す事さえありえるのだ。

「あっ、いたいた、兄貴！」

屋上の扉が開かれてアントニーとクレシアがやってきた。

「怪我の方はどうだった？」

「へへへ、おかげさんでばっちりっすよ、兄貴」

アントニーは陽気に笑いながら怪我した方の腕を振り回す。

「いでっ」

やはり、無理したようで肩を抑えて痛がっていた。

「すぐに調子に乗るんだから、あなたは銃で撃たれたのよ」

「かすり傷だって、いてててて」

「化膿するかもしれねえし、安静にしてな」

トレインの言葉にアントニーは照れたように頭を掻いた。

「はい、すいません兄貴、そして危ないところをありがとうございます
ます」

「ありがとうございます、あなたに助けてもらわなければ今頃、二人で砂漠に埋められているところでした」

二人はトレインに頭を下げた。

「礼なんかいいんだ、ところで、兄貴って言うのは俺のことか？」

「ええ、一見したところから只者じゃないと思いました、見ず知らずの俺達を助けてくれたあの心意気、俺、兄貴に惚れちゃいました、どうか、兄貴として呼ばせてください」

「止せよ、俺は舎弟なんてとらねえし、大体、あんたのほうが年上だろうよ」

「そんなの関係ねえです、ようはあなたに、ハートネットさんに惚れたという事が重要なんですから、どうか、迷惑じゃなければそう呼ばせてください」

トレイン「ハートネットは基本的に一匹狼だ。」

誰ともつるまないし、誰かを舎弟にする事は無い。

兄貴なんて呼ばれる筋合いも趣味も無いので、断ろうと思った。

だがわけのわからない熱の籠ったアントニーに、戸惑い簡単に断る事ができなかつたのだ。

「まあ、別に構わないけどな」

「やったー！ありがとうございます、兄貴」

アントニーはトレインに抱きついてくる。

「止せ、気持ち悪い」

トレインはアントニーを振り払った。

「いいじゃないですか、男同士なんですし」

「俺はそんな趣味はねえ、なあ、あんた、こいつそつちの気もあるのか？」

「ノーコメントよ」

しれっとクレシアは眉一つ動かさずに答えた。

トレインは額から汗を流しながら身構えた。

「俺に近づくな、近づいたら容赦なく蹴る」

「冗談ですって、俺その気は毛の先一本無いですってば、クレシア、お前もキツパリ無いって断言してくれよ」

高層ビルの一室にて、深海魚が水槽の中で泳いでいた。

彼は深海魚が好きだった。

誰も行く事ができない真つ暗な深海に住まう彼らの生き方には共感ができたし、何よりこの醜い魚達がとても好きだった。

うわべだけ美しい魚ならいくらでもいる、人間でもそつだ、うわべだけよく言う事は誰にでもできる、だから、そんな人間は信頼できない。

醜さを前面に開き出してこそ、水槽の中の深海魚達のように魅力的な生き物になりうるのだ。

そう言った人物とこそ、暗い暗い深海のような世界でも一緒に歩いていけると思う。

「そつか、彼を殺せなかつたか」

相変わらず無表情な顔つきで淡々と話す。

怒っているかどうかもわかりやあしねえ、こいつは木偶か、人形か？
カルロスは頭を下げながら心の奥で毒づいた。

ギルバート「レインフィールド、

190センチを超える長身でやや細身に分類する。

顔つきは整っており52歳に見えない若さ、髪こそ白髪なもの大
体、30代後半ぐらいの若さを保っていた。

青白いまでに白い肌はある意味病的といえる。

金縁の眼鏡を上げるとギルバート「レインフィールドはカルロスを
見つめた。

「…何事にも期間というものがある、時は金也という格言もある。

仕事を見事にこなそうとも、決められた期間を超えてしまえば意味
がなくなるといふわけだ」

「しかし」

「エル「グラントは偉大な男だった、だが愚か者だ、我々はね、長
い間、君達『スコピオ』を支援してきた、他の麻薬組織を抑え、

この国の平和と安定をもたらすために手と手を取り合い共栄の道を
歩んできたつもりだったのに、彼は裏切り、あの独裁者アル「コル

テカに取り入ろうとしていたのだ、我ら秘密結社クロッスの幹部達の正体と、
組織の秘密を楯にしてな」

「申し訳ありません」

「なに、君が謝る事は無い、私的には今回の件など、アル「コルテ
カとエル「グラントが死んだ時点で水に流してやってもいいとさえ
思っているのだよ、だが、そういうわけにはいかないという意見も
他の幹部達の間で出てきている、確かに我々を裏切り、未遂に済ん
だが我々を脅したのも事実、言いたい事はわかるかね？」

「はい、理解しています」

「そう、我々とのビジネスを続けたくば、君達も変わらぬ誠意を見
せろといいたいのだ、あの男を後何日ぐらいで始末できる？」

「3日もあれば…」

レインフィールドの冷たい瞳がカルロスを睨みつける。

この男の目は以前から何かに似ていると思っただが、今わかった。

蛇だ、あの蛇の冷酷で残忍な瞳に奴の目はよく似ている。

そして自分は蛙、奴の前では一呑みにされるだけの裸のひき蛙に過ぎない。

「明日…、确实の砂漠の干物と化してご覧に入れます」

「よろしい、明日、明日だな」

レインフィールドは椅子から立ち上がった。

巨大な水槽に手を触れて愛しげに奇妙な姿の魚達を眺める。

そしてしきりに何かを魚達に話しかけるのだ。

これまで4、5回ぐらいしかここにきたことが無いので言い切れないが、レインフィールドが人間らしい表情を浮かべるのは、深海魚に話しかけている時だけだとカルロスは思うのだ。

彼の中の愛情や慈悲というものは人間やその他の動植物には、おそらく向けられる事は無い。

彼が愛し慈悲をかけるのは他者から見てグロテスクだと思うものだけだ。

道端に咲いてる百合は容赦なく踏み潰す、そういう男だ。

「どうだね、可愛いだろう、この子達は」

チヨウチンアンコウを指差して微笑みながら尋ねてくる彼にカルロスは愛想笑いを浮かべながら首を楯に振った。

カルロスはクロノスという国際的秘結社の事を詳しくは知らない。あまり深入りする事はエルⅡグラントに止められていた。

彼らは秘密の漏出を防ぐためならばどんな手段をも使ってくる。

ただスコーピオを南米の協力者として支援してきた巨大な組織だという事を知っているし、その支援が打ち切られることになればスコーピオは急速に弱体化し崩壊しかねない事態に陥る事になるという事を理解していた。

そして亡きボス、エルⅡグラントは彼らと手を切ろうとしていた、…スコーピオを裏切ろうとしていた彼は死んで当然だった。

もう一つ知っている事は、クロノスの幹部達は皆、強大な権力や財力を持つ資本家達だということだ。

クロノスは自分達のようなマフィアではない、社会主義者でも、共産主義者でもない、宗教団体とも違う、彼らは資本主義者であり、彼らの行動はすべてビジネスで成り立っている、世界経済を影で操っているのは彼らだという話をエル＝グラントより聞いた事があった。

本当のところはどうかかわからない。

世界中の戦争や政治すら操ってしまうような組織などカルロスごときの想像の外の話なのだ。

スコープオの支援者で無ければ、わざわざ関わりあおうという気にはならない、カルロスはカトリック教徒ではあるが、神にはあえて触らない主義者だ。

だが、エル＝グラント、アル＝コルテカという二人の巨人を失った以上、スコープオは急速に弱体化している。

クロノスの支援がなければ他の組織に食い潰されるのはもはや時間の問題だ。

彼らはスコープオを絶対のパートナーとは見ていないが、こちらにはクロノスはなくてはならない存在だ。

恋愛に例えれば、釣り合いの取れない相手に対する一方的過ぎる片思いだなど、カルロスは皮肉げに笑う。

クロノスの幹部達は表に顔を持っている以上、秘密の漏出は徹底的に嫌う。

『イーグルアイ』の異名を持つアントニオは幹部ではなかったが、ボスの側近中の側近で常にボディガード兼運転手としてそばにいた彼は、クロノスの秘密を知っている。

少なくともクロノスとスコープオの関係を知っている。

奴は生贄だ。

クロノスという異端の神を味方につけるための羊だ。

早く、奴を見つけないければ、見つけて殺さなければ、組織のために、

俺のために

夕食の後、闇医者 of 建物を出たトレイン達は近くにある、廃墟に身を移した。

もともとは外資系企業が営むホテルだったらしいが、アルコルテカ of 政策 of せい de 経営者が国を追われて、そのまま買い手がつかず、現在は巨大な廃墟と化していた。

何にしる、しばらくの間、身を隠すには丁度いい物件だ。

そこについた途端、アントニーに頭を下げられた。

自分達は組織を抜けたことで奴らに追われている。

負傷した状態の自分では彼らから逃げる切る事はできない。

どうか、自分達を逃がして欲しい。

明日、偽造パスポートが手に入る。

パスポートを入手した後の逃し屋にアメリカ of アリゾナ州まで逃してもらおう。

それまでの間、自分達を守って欲しい、金は一万ドル払う。

簡単に断る事はなんだか後ろ髪を引かれるよう de できなかった。

トレインは少し、考えさせてくれるように告げると廃墟の中をうろつした。

こういふ風に、何の意味も無くぶらぶらするのが好きだった。

しかし、どうする？

本来の目的とはまったく正反対だ。

彼らを守る事などできるはずが無い。

彼らが寝静まった後、アントニーの顔に枕をかぶせて発砲するか、それが自分にとって一番の方法だ。

そうしよう。

ターゲットと一瞬でも馴れ合った自分がおかしいのだ。

難しく考える事はない、何も考えずに引き金を引けばいい。

いつもの事なのだから……

「ハートネットさん」

声をかけられて振り返った。

そこにはクレシアが立っていた。

「よっ」

「ごめんなさいね、巻き込んだじゃっただけでも迷惑なのに、あの人、変な事を頼んじゃって」

クレシアは申し訳なさそうに頭を下げる。

「彼はね、私のために親同然の人を殺したの」

「エルⅡグラントを、あんたのために？」

「そう、エルⅡグラントは頭が良くて南米一の偉大なボスだった、でも、欲しい女は力づくで物にする、女癖が悪いという欠点があったわ」

「あんた、まさか……」

「……このお腹の中の子供はもしかしたら、エルⅡグラントの子かもしれないの、それは私にも分からない、私とエルⅡグラントがそういう関係になった事を知ったあの人は、血相を変えてエルⅡグラントの元へ飛び込んで言ったわ、そして」

彼を殺した、クレシアは涙を拭った。

「彼は親同然の人を殺して傷ついたわ、そして後悔している、多分、私とこの子がいなければ彼は自殺していた、あの人は優しい人、つらいのにそれを隠して、お腹の中の子供は自分の子供だといって大切にしてくれる、何故、あなたにこんな話をしているかわかる？私にはあなたに手を引いて欲しいの、所詮、そんな痴情の纏れ、例えばここで私達が死のうとしててもそれはひとえに私達の自業自得よ、そんな事にあなたが関わる必要は無いわ」

「しかし、腹の中の子供が哀れだ、あんたらは死んでもいいのかもしれない、だが産まれてくる子供には罪はねえ、だからあんたらは明日を生きなきゃならねえんだ、あんたらは、俺が守る」

その言葉にクレシアは驚いたようだ。

「ばちばちと瞬きをする」

「いいの？」

その言葉にトレインは頷いた。

「ああ、明朝ここを発とう」

「ありがとう、なんてお礼を言ったらいいかわからないわ、さすがにあの人が見込んだ男ね」

クレシアはそういうと背中を見せた。

そして数歩歩いて再びこちらを振り返る。

「正直嬉しかった、知り合って間もない私達の事を、顔も見たことも無い他人の赤ちゃんの事を気にかけてくれてありがとう」

クレシアが去ってゆく。

「ハートネット」

闇の中から男の声が聞こえた。

トレインが振り返るとそこには中東に行った筈のエミリオが立っていた。

彼は静かにこちらを睨んでいた。

怒りの光をその瞳から探す事はできない、できないが、何かただならぬ気配を感じた。

「エミリオか、何故、ここに？」

「セフィリアから中東に行くのを延期して君を見張れと言われたんだ、あの人はこの成り行きを既に予想していたよ、君はアントニーを殺せない、でも、安心してくれ、君が殺せないなら僕が殺す、セフィリアはそれで君の失態を不問にすると言っていた」

「そうか、さすが隊長だな、そんな事まで読んでいたのか、だがエミリオ、そうはさせねえ」

トレインは銃を抜き、エミリオに向って構えた。

「ハートネット」

エミリオは眼鏡の奥の瞳を細めた。

銃口を向けられているというのにその落ち着きは変わらない。

彼は、死なないと思っっているわけではない。

ここでトレインに撃たれても仕方がないと思っっている。

それは彼の人生が常時、命を的にし、人の死に触れ、死を受け入れ

ているからに違いない。

死を受け入れているから不必要に取り乱したりしない、それだけだった。

「クロノスに、セフィリア、アークスを敵に回す事になるぞ」

「構わねえ、約束しちまったんだ、守るってな、それにもういい加減、この檻から出て行きたいと思っていたところだったんだ」

「そうか、覚悟あるのなら僕はもう何も言わない、ほら、撃たないのか？」

エミリオは少しズレ落ちた眼鏡のフレームを上げる。

その目の相変わらず穏やかだったがその輝きの中には冷徹な殺し屋の光を放っていた。

「僕の得意とするのは、弓による狙撃、気配も音も無く、姿さえ見せずに君を殺す自信がある、今から、四六時中、君達を狙う事にするよ、だけど今の僕は丸腰、そして接近戦はおそらく、番人中で最弱だと僕は自負している、今ここで殺した方が君のためだと思うぞ」
「嘗めるなよ」

トレインは銃を手の中で回すと足のホルスターに納めた。

「丸腰のお前を撃てるかよ」

「君は甘い、甘すぎる、よく今まで生きてこれたものだと思うよ」
そう呟きながらエミリオは背中を向けると闇の中へと溶けるように消えてゆく。

「次に姿を現すのは、君を抉った後だ、さようなら」

闇の中で声だけが響いた。

その声が最後だった。

後は闇の中からは何の気配も感じられず、無明の静寂だけがその場に残る。

エミリオは今、この夜の闇と完全に同化を果たした。

「ああ、お前とは二度と会わねえ事を祈っているぜ」

坊主一人か？親は？そうか、親無しか、俺もそうだよ、親の顔

知らないんだ、腹空いていないか？あそこにレストランがある、おじさん、あそこに行くんだ、どうだ、お前も食べていけないか、遠慮なんてすることは無い、さあ、おいで

「親父…」

車の中でアントニーは目を覚ました。

エル・グラントとはじめてであったあの日を思い出していた。

アントニーの母親は早くに自分を捨てて男と共に逃げてしまった。

父親は薬の売人をしていたが、大きな抗争に巻き込まれてアントニーが9歳の時に殺され、死体が一月後に砂漠で干からびているのを発見された。

それからずっと一人で、盗みを働いて生きていた。

あの日、エル・グラントの財布を掏ろうとした、だがエル・グラントは見逃さなかった。

あの大きな手で腕を捕まれた時はまた、殴られると思って身構えたが、彼は手を上げなかった。

それどころかあの太陽のような笑顔で自分の頭を撫でてくれたのだ。あの日から、彼はもう一人の自分の父親となった。

エル・グラントの下で働き、ボディガードとしていつも彼のそばにいた。

彼のために抗争の度に撃ち合いに参加し、その度に人を撃ち殺してきた。

だがその事に後悔はない。

後悔があるとすれば…

「ついたわ、アントニー」

クレシアは車を止めた。

そこはスラム街の古びたアパートの前だった。

このアパートの301号室に偽造パスポートの製作を生業としているココと言う男がいる。

「よし、俺が行って来る、兄貴はここでクレシアの事を守っていてください」

「ああ、お前こそ、気をつけるよ」

「はい」

アントニーは親指を立てて、にこっと笑うとアパートの中に入った。アパートの階段を登ってゆく。

鬼ごっこする子供達がアントニーのそばをかけてゆく。

「おっと、すまねえな」

地べたに腰を下ろしてマリファナを吸ってぼーっとしている老人の脇を通り抜けると、ココのいる301号室にたどり着いた。

ココの部屋の隣の部屋はドアが破壊されており、入り口にはKEEP OUTと書かれたテープが張られていた。

おそらく、殺人事件が、それも組織がらみの事件が起こったのだろう、この辺のスラムではとりわけ珍しい事ではない。

アントニーはココのいる部屋の前についてある呼び鈴を鳴らした。

呼び鈴は壊れているようで、何度押しても、うんともすんとも言わないので、拳を握り締めて少し強めに扉を叩いた。

「俺だよ、ココ、アントニーだよ」

「おう、アントニーか、はいつて来い」

「よう、邪魔するぜ」

アントニーは扉を開き、アントニーの部屋に足を踏み入れた。

この部屋は2、3度、訪れているがその度に別世界にきたんだと思う。

外見は、オンボロアパートだがココの部屋だけは最新の機材が揃っている。

他の部屋の住民にはけして手が出せない高価な機材であり、60年代より変わらない腐りかけのアパートで、この部屋だけ近代化の風が吹いていた。

ココは60代後半の老人だった。

元はマイクロソフトで役員として勤めていたと聞いていたが、どういふことか今は、すっかり落ちぶれマフィアやお尋ね者たちに国外逃亡のための偽造パスポートを偽造して生計を立てている。

「すまない、ココ、早々に、この国を発たなきゃならねえんだ、早くパスポートをくれねえか」

「すまん、それはできないんだ」

申し訳なさそうに言うココの言葉に一瞬、アントニーは耳を疑った。

「な、何でだよ！今更、手を引くということかよ！？」

「すまん、そういう事だ、俺もプロだ、こんな事は言いたくは無い、だが『バイソン・ホーン』カルロスはあるたの行動をすべて読みきっている、昨日、警告にうちに来たんだ、あんたにパスポートを渡したら殺すとな、あれは脅しじゃない、俺には女も子供もないが、それでも生きていたいんだ」

「だが」

「言いたい事はわかる、だが、逃し屋ジミーのところにも奴らは既に手を回している、奴も俺と同意見だろうぜ、…しばらくほとぼりが冷めるまでどこかに潜伏しろ、それ以外道はねえ」

「わかったよ、すまねえ、迷惑掛けたな」

「すまねえな、だが出て行くときも気をつけろ、奴らがどこで見張っているかわからねえ」

ダウンッ！

突然、ココの部屋のドアがショットガンで破壊され屈強な男達が押し入ってきた。

「奴ら、こんなところまで」

「逃げる、アントニー！俺にかまうな」

ズドン

ココの額を一発の銃弾が貫いた。

「ココ！」

アントニーは銃を抜きココを撃った男に銃弾を撃ち込んだ。

一人を倒したが、部屋に入ってくる男は全員で6名

部屋の外で待機している人数を考えるとその倍はいそつだ。

全員サブマシンガンやショットガンで武装しており、それを雨あられのように発砲してくる。

ココの部屋の近代化の象徴、パソコン、プリンター、スキャナー、デジタルテレビ、エアコン、マッサージチェア、除湿機がことごとく弾丸の嵐によって破壊される。

分厚い樫でできた丸テーブルを楯に応戦するも、この火力の中では崩壊も時間の問題だった。

「アントニー！」

トレインの叫ぶ声を聞いてアントニーはベランダに目をやった。

「！」

車がベランダの真下に待機している。

「飛び降りろ、アントニー！」

馬鹿な、ここは3階だぞ。

死ぬ可能性がある高さ、死ななかったとしても大怪我しかねない高さだ。

アントニーはニヤリと不敵に笑った。

配られた手札の中身は眩いばかりの役札なのか、それとも目を覆いたくなる役無し（ブタ）なのか？

だがそれでも賭けてみるしかない。

アントニーはベランダに飛び出すと迷わずそこから飛び降りた。

スコープオの構成員達はあつと声を漏らす。

アントニーはクレシアの運転する赤いキャデラックの上に見事着地する。

キャデラックの天井はへこんでしまったがアントニーはなんとか生きていくようだ。

そのままアクセル全快で車を彼方へと走らせ、彼らは一目散に去っていった。

「すまねえ、兄貴、クレシア」

アジトに戻ったアントニーは二人に頭を下げた。

「俺がいたらねえばかりに」

「仕方ないわ」

クレシアはアントニーの肩を抱いた。

「スコーピオはこの街にも大きな影響力を持っている、逃げられはしないのよ」

「馬鹿、諦める事はねえ、どこかにどこかに逃げ道があるはずだ」
アントニーは必死でそういった。

トレインは黙ってソファーに座りながらマルボロを啜っていた。
こうなる事はわかっていた。

奴らの背後にはクロノスがいる。

たとえ無事にこの国から逃げ出せたとしても、どこまでも追っ手はやってくる。

鳥ならば翼を持ちどこへなりへと飛んでゆける。

だが、人間はそういうわけにはいかない。

たとえどこかに逃げ延びたとしても、けして自由というわけにはいかない。

金に住所、経歴に言語、人間社会のあらゆる制約からは逃れる事はできない。

トレインは自嘲げに口を歪めた。

ならば自分は何故、彼らと一緒に行動しているのだろう。

彼らはある意味『俺達に明日は無い』のボニー&クライドよりも絶望的な今日を生き、明日を迎えようとしているというのに…

その理由をはつきりとは答えきれない。

だが一番の理由はおそらくは、組織を抜けて生きようとする彼らの生き方が縛られ続ける自分には眩しく見えたのだろう。

もし、このまま今日、死んだとしても…、この事を悔いる事は無い。
第一、あの雨の日に一度、自分は死んでいるのだ。

人間だった幼い自分は冷たい雨の中で死に、今いるのは、この世に生きる理由などもたない、おそらくはこの世界から必要とされていない黒い猫が一匹いるだけなのだ。

真の自由がこの世に存在しないというならば、せめて死に場所だけは、死ぬ理由だけは自由に決めさせてもらおう。

「そうだ、国境のフェンスの下に穴を掘って向こうにいけねえだろうか、あれだけ、広い土地にフェンスだけが張ってあるんだ、警備が行き届いているとは思えねえ、警備が手薄な時を見計らって……」
「……そういう方法なら昔から毎年何人もの人間がやってて、撃たれたり捕まったりしているぜ、今じゃ地面に鉄板が埋められているって話だ」

「兄貴」

「逆に言うならば昔なら、可能だったんだ、こいつは推測だが、昔の抜け穴がまだ生きているところがあるはずだ、もしかしたら、それで商売をしている連中だっているかもしれねえ、そいつらを探して金を渡し、向こうに渡ろう」

「そいつはいい、さすが兄貴だ」

アントニーはうおおおおと歓声を上げる。

だが、あいにく、そんなにうまくいくとも限らねえ、そんな抜け穴、もう、全部見つかって埋められちゃまっている可能性のほうが高いのは否めねえんだぜ、それこそ、スコピオの連中に見つからないように、そいつを探し当てるのは高レート賭けになる

トレインは心の中でそう呟いた。
二人の表情に希望がわずかに宿っているのだ、それを口に出してはいえない。

希望があるなら、やってみる価値はあるか、買わないくじは当たるはずがねえんだ

「……」

トレインは窓からチラリと外を見てみた。
明らかに堅気ではない格好の男達が銃を持ってこの廃墟の中に入ってくるのだ。

その中にはあの太った髭面の男、カルロスがいる。

「アントニー」

「わかってますよ」

アントニーは落ち着いた表情でルガーK P 9 0 D Cのセーフティ

を外してスライドを引いた。

「気づいたのか」

「これでもスコピオじゃ『イーグルアイ』の名で恐れられたガンマンです、わかりますとも、鉄と火薬の匂いには敏感なんですよ」

「そうか、客はざっと30人、この廃墟にや逃げ場はねえ、突っ切るしかねえ」

扉が乱暴に開かれ入ってきた男達が銃を構える。

しかし、それより先にトレインとアントニー、二人のガンマンが銃を構えていた。

秘密結社クロノスの技術により作られた超金属オリハルコン製の4マグナムリボルバー『ハーデイス』

アメリカの銃器メーカーが作り上げた45ACP弾を発射するステンレス製のオートマチックピストル『ルガーKP90DC』

瞬きする間も与えないほどのスピードで2丁の拳銃が次々に火を吹いた。

硝煙の後には侵入者達の死体だけが残る。

『遅エゼ、この三流ガンマンが』

硝煙を上げる銃を構えながら二人は同時に同じセリフを吐き捨てた。

ESCAPE Good Bye White Bird <前編>

Fin

2010/5/19

To Be Continue..

後編

空をカラスが群れを為してぐるぐると廃墟の周りを飛びかう。彼らは知っている。

死の臭いが廃墟から濃厚に漂ってくることを。

死肉を啄ばむ事ができるといふ事を。

廃墟からは戦地さながらの激しい銃声が絶え間なく響いていた。

廃墟の前に一台のリムジンが止まり、黒い服を着た数人の男が降りてきた。

「あん、何だ、中で撃ち合ってるのか？」

とバルドルが廃墟を下から見上げながら言う。

「それはおそらく、地元組織の連中だろう、我々に手柄を見せる為に先走ったようだ」

車からギルバート・レインフィールドが降りてくる。

「ハッ、気の毒に」

その言葉を聞いてバルドルは鼻で笑い飛ばした。

「上官が無能な兵士とは哀れなものだ」

とバルドルの隣にいた男が何の感情を込めずに呟いた。

その男は奇妙な男だった。

190センチを超える長身で、顔の半分は彫刻のように色白で整った形をしていた。

後の半分は…、頭に仮面とも兜ともわからぬものを被っており、目からはそれに覆い隠されている。

仮面の左の目にあたる部分には？という数字が刻まれていた。

??クランツ＝マドウーク

アンドロイド

その姿を見て誰もが一度は機械人形という言葉を出す、無表情で機械的な冷たい印象を持つそんな風貌な男だった。

「まったくだぜ、連中は猫でも狩るつもりかもしれないが、中を覗いたら人食い虎だったんだ、相手がハートネットの野郎じゃあ分が

悪すぎる賭けだ、連中、今頃皆殺しにされているぜ」
ずしゃっ

リムジンの天井に廃墟の三階の窓を突き破って落ちてきた男の死体が叩きつけられる。

「なっ」

バルドルはくちやくちやガムを噛みながら皮肉げな笑みを浮かべた。
「連中は自分達の組織というものがそれほどまでに大切なのだ、それほどまでに手柄を上げて我々に気に入られたらしい、だが我々はその行為がすべて無駄骨だと知っているのだから、救えんね」
といいながらレインフィールドは飛び散って顔に掛かった男の血を冷静にハンカチで拭き取っていた。

「別に連中が死のうがどうなるうが、知った事ではないが、裏切り者の???とイーグルアイはこの廃墟で必ず仕留めなければならぬ、そのためにお前達を呼んだのだ、やってくれるな、???、???」

「ハッ！」

バルドルは鼻で笑って、ヘイムダルの鎖を地面に叩きつけた。

「滅殺だ、ここからはもう、死人しか出さねえ、逃しゃあしねえぜ、ハートネットオ！」

「野郎、シャンデリアの上を飛び移ってやがる」

廃墟ホテルのホールでトレインとスコープオの構成員達との銃撃戦が繰り広げられていた。

トレインは身軽にシャンデリアとシャンデリアの間を飛び移り、スコープオのガンマン達は狙いをつける事が用意ではない。

逆に弾丸がシャンデリアを砕き、ガラスのシャワーとして降ってくるので下にいるものにとっては、余計に危険極まりない事だった。

「ひゃあああ！」

トレインは構成員の一人の頭を踏みつけて着地する。

「野郎」

着地点にいた相手が銃を構えるよりも早く、ハーデイスを次々に発砲して撃ち倒してゆく。

「早エ、野郎、撃つ暇さえ与えねえ」

と、トレインの早撃ちを離れた場所から見ていた構成員の一人がそう漏らした。

カチツ！

その時だった。

引き金が引かれたハーデイスから乾いた音が響く

沈黙が告げるもの、それは弾切れだ。

それを見ていた残った構成員達は、嬉々して一斉に銃を構えてトレインを取り囲む。

「ハハハハ、運のつきだな、このドグサレが！ごぶっ！」

先頭の男の顔面にハーデイスが投げつけられた。

直撃した鼻柱がへし折られ男はそのまま地面に崩れる。

トレインは足元に転がっていたウージーを蹴り上げた。

ウージーを右手で受け取るや否や、構成員達に向けて銃弾を連射する。

ウージーが弾切れを告げると、トレインはウージーを投げ、横に転がって自分を狙ってきた銃弾をかわすと同時に、床に落ちていたショットガンをつかみ取り、引き金に指を掛けて構成員の一人の体を吹き飛ばす。

ショットガンを落とすと今度は二丁の拳銃を床に倒れていた死体の手から奪い取った。

トレインは黒いコートを揺らしながら二丁のベレッタM92FSを操り、東西南北、すべての方向に弾丸を撃ちまくってゆく。

すばやい動きで敵を翻弄し、敵から奪った銃を使い、そしてあまりにも早く、それでいて精密な銃技で敵を次々に仕留めてゆく。

（まるで踊っているようだ、こんな風にハジキを操る奴なんて見た事がねエ）

トレインに撃たれて、薄れゆく意識の中で構成員はそう思った。

二つの銃のスライドが後ろにさがった状態で動かなくなり、弾切れを告げた。

「弾切れか」

トレインは2丁の銃を下に落とす。

乾いた音を立ててベレッタM92FSは床に転がった。

トレインは周囲を見回した。

ホールにはトレイン以外、立っている者の姿は無い。

トレインは左手に持ったワイヤーを引っ張った。

ワイヤーに繋がったハーデイスがトレインの手の中に戻ってくる。

ハーデイスの銃底についている飾り紐はワイヤーになっており、引っ張ると伸びるようになっていて、

銃にそんなワイヤーがついていても仕方がないような気がするが、銃を落とさないようホルスターに括り付けるのに使用したりと以外に重宝していた。

「いろいろ、銃を撃つてみたが…」

ハーデイスのシリンダーから空薬莖を落とした。

「やっぱり、お前が一番だぜ」

愛銃にそう、囁きながら弾を詰め始める。

ホールの扉が突然、大きな音を立てて吹き飛んだ。

破壊された扉の向こうから黒い鉄球が火を吹きながら飛んでくる。

トレインは鉄球を紙一重でかわす。

背後にあったグランドピアノが直撃を受け粉々になって四散する。

ジャララ…

鎖が音を立てて引っ張られ、ヘイムダルが使い手の手の中に帰ってゆく。

「こんな不意打ちが俺に通じると思ったか？ 駄犬」

「…少しな」

バルドルは肩をすくめた。

ホールに入ってきたのは二人

一人は???バルドリラス「S」ファンギーニ、宿敵だが手の内の多

くをお互いに知っている。

それに対してもう一人の方は初対面だ、しかし、仮面に刻まれた？の文字から??クランツ＝マドウークである事が推測できた。

奴があのかクランツ＝マドウーク

トレインは目を細めた。

噂に聞いているクランツは4年前に敵に捕まり、拷問を受けた。

それはそれは中世さながらの酷い拷問で、その時にクランツは目玉を抉られたと言う。

以来、奴は真の意味で闇の中に身を置く事になった。

しかし、視力を失った奴が未だにこのクロノ・ナンバーズに在籍しているのは何故か…

それは恐るべき奴の異才によってすべての問題はクリアされたのだ。聴覚の鋭敏化

それは奴の執念によるものか怨念によるものかはわからない、だがそれは驚くべき、恐るべき一つの奇跡に他ならなかった。

拷問を受け、死の境を彷徨った奴の聴覚は人間の何十倍にまで高まった。

奴は音だけで敵の動き、心理状態を悟る…、敵が動く前にすべての行動を悟り闘う奴の動きは拷問を受ける前よりも、目が見えていたときよりも、鋭さが増しているようだ。

「君とは初めてだったな、トレイン＝ハートネット」

どうやら自分に投げかけられている視線に気づいたようだ。

紳士らしく胸に手を当てて丁寧に会釈する。

「??クランツ＝マドウークだ、はじめまして、そしてさようなら、ハートネット、早速だがこれから君を切り刻もうと思う」

そういつて彼は懐に手を入れると？の刻印が刻まれた一振りのナイフを取り出した。

（ナイフ…、暗殺者らしい得物だが、そんな小さな刃で銃を持った俺を仕留められると思ってやがるのか？）

「そんなに馬鹿にしたものではない、ナイフは銃と違って弾切れが

無いし、いつまでも闘える、そして、接近戦ならば構えなければならぬ銃よりも断然速い」

「人の心を読むな、CQC戦術なんて幻想に過ぎねえ、ナイフで銃に勝てるか、ボケ！」

「ハッ、ハートネットよお、クランツはメイソンの親父が最高のナイフ使いと称したくれえだ、嘗めてるとすぐに五体満足じゃ済まなくなるぜ」

メイソン…

???で半世紀以上ナンバーズに就任している老人だ。

何人もの暗殺者を、何人ものナイフ使いを見てきたあの老暗殺者が太鼓判を押すのならば、間違いなく彼こそが最強のナイフ使いなのだろう。

「ハートネットよお、俺はこうなる事を予見してたぜ、いつか、俺とお前はこうして闘う運命だったな」

「嬉しそうだな、バルドル」

「ああ、嬉しいぜ、てめえをこの手でぶっ殺せるなんてなあああああ！」

この戦闘狂どもが！

トレインは舌打ちをした。

自分を殺し、敵を殺しあらゆるものを殺し尽して一つの武器を極限まで極めた異能の戦闘集団であるナンバーズの中でも彼らの存在は異質だ。

バルドル、クランツ、そして…セフィリアは試験管の中で優れた戦士のDNAを掛け合わせて作られた、生まれながらにクロノスに忠誠を誓った殺し屋

組織への忠誠と、生まれながらの戦闘教育から他の番人と比べてもその戦闘能力は突出しているはずである。

クランツがオリハルコン製のナイフ『マルス』を構えた。

氷のように美しい刃が怪しい輝きを放っている、まるで持ち主と同様、血を欲しているように。

「さあ、はじめようか、さあ、新たな弾薬を詰めたまえよ」
あくまでも紳士的な口調で、冷徹な声が響く、癩に障る。

「隋分、お優しいんだな、ジャック!! ザ!! リツパー様は」

トレインはクランツを睨みながら44マグナムの弾薬をシリンダーに詰めてゆく。

「何、これから思う存分、君を切り刻むんだ、6発ぐらい思う存分に撃ちたまえよ、指が無くなる前にな」

「きつと後悔するぜ」

トレインはリロードした銃を構えクランツに向けて発砲する。

その銃声が鬨いのゴングとなった

クランツはトレインが放ったマグナムをマルスで叩き落とすとそのまま、トレインに向かって一直線に駆けてゆく。

速い!

トレインは飛ぶような速さで向ってくるクランツに向けてさらに発砲する。

クランツは横に体を移動させると彼の体で隠れていたヘイムダルが姿を現す。

発射された2発のマグナムはブースターから火を吹いて飛んでくるヘイムダルに簡単に押しつぶされる。

「ちっ」

慌ててヘイムダルをかわすトレイン

そこに白刃が閃く。

ズパッ!

トレインのコートの胸元がスッパリと裂ける。

少し、胸部を刃が掠めたが、致命傷には程遠い。

更なるクランツの追撃をトレインは後ろに宙返りで避けつつ、発砲するが既にその動きは読まれており、紙一重でかわされる。

「フッ、4発目だ」

クランツは血の付いたナイフを嘗める。

かわしきったつもりだったがわずかにマルスの刃は右肩を捕らえて

いた。

「ぐあ……」

トレインの右肩から血が吹き出す。

トレインは後ろに跳んでクランツとの間合いを避けた。

こいつ……

トレインは斬られた右肩を押さえながらクランツを睨みつける。

奴の動きは機械の様に殺気も無く、気配も無く、そして精密だ。

その上、奴はあの心眼とも言える聴覚を持ってこちらの動きの先の先を視ている。

いつ斬られたのかもわからないこの斬撃は闇の中で生きている奴だからこそ振るえる魔剣だ。

そして

ズシャッ！

床を突き抜けてヘイムダルが顔を出し襲い掛かってくる。

「くっ！」

「ハハハハハッ、サルサだ、最高にハイなサルサを踊れ、ハートネツト」

ヘイムダル！

ズシャッ！

壁や天井、床をぶち抜いて襲い掛かってくるこいつだ。

その威力はもはや鉄球ではない、その気になればビルさえあつという間に倒壊させられる威力だ。

世界最硬の超金属であるオリハルコン製のボディによる頑丈さはさることながら、鉄球についている四基のブースターがその威力を上げ、変幻自在、縦横無尽に飛び回る術をこいつに与えてしまっている。

こいつは鉄球ではなく、ホーミング機能がついた砲弾だ。

グシャッ！

ヘイムダルが天井に大きな穴を開け4階にあったベッドやら本棚やらの家具の残骸が落ちてくる。

トレインは慌てて落ちてきた残骸をかわしてゆく。

ヘイムダルはさらに障害物をぶち抜きながらトレインに向ってくる。ヘイムダルは????の大砲ウルスラグナについて、番人中、第二位の破壊力を持っている。

この二つの武器はもともと、対人用を想定して作られたものではなく、その威力は強すぎて人間相手に使えば確実にオーバーキルだ。派手好きで根っからの戦闘狂のバルドルは建物内で平気でこれを使う。

いや、建物内での戦闘こそ自分のホームグラウンドだと自負しているのだ。

そして狭い建物の中で、障害物を破壊しながら進み敵を追い詰める、暴虐な破壊行為を

戦闘能力に置き換えたこの戦術を編み出したのだ。

「ヒヤハハハハハハハハハハ、逃げる逃げる、ハートネット、ヘイムダルはア！壁を壊し、邪魔者を潰し、どこまででも追いかけるがお前はそうはいかねえ、逃げれば逃げるほど逃げ場を失うだけだぜ、これが俺の破壊暗殺術（Destroy Erase）だ」

「そのどっこが暗殺術だよ！」

叫びながらバルドルに向けて一発、発砲する。

しかし、トレインとバルドルの間に鉄球が突っ込み、瓦礫の雨と同時にマグナムを叩き潰してしまふ。

「残りは一発だな…！」

突然、機械的な声が後ろから聞こえた。

ズシャツ！

背中に焼けるような激痛が走る。

「うおおお！？」

トレインは叫んだ。

背中に生温かい液体が流れてゆくのをを感じる。

バルドルの野郎が馬鹿みたいに大騒音たてて攻撃してくるせいなのか、こいつの気配がまったく読めなかった。こいつのは差し詰

め無音暗殺術（Silent Erase）ってどこか
静と動、知ってか知らずか、こいつらは、お互いの長所を最大限に
利用している。

バルドルが動かすヘイムダルの動きにそって、クランツが動きマル
スを振るう。

ヘイムダルに気を取られればクランツが、クランツの刃の動きを気
にすればヘイムダルが…、そして奴らはお互いの隙を埋め合わせる
ように行動している。

まともに二対一をやっちゃとてもじゃないが勝ち目は薄い。

「肉片巻き散らしてぶっ飛べ、ハートネット！」

バルドルがヘイムダルを投げる。

ブースターが火を吹き、さらに加速してトレインに向かってゆく。

ヘイムダルをかわしバルドルに銃を構える。

バルドルは突然、鎖を引っ張った。

ヘイムダルのブースターが向きを変える。

「手動運転だと」

右手に持つグリップについたコントロールバーで通常は鉄球を操る
が、鎖を引っ張る事でその指令よりも早く、鉄球の動きを操る事が
可能だ。

「ようやく捕まえたぜ、ハートネットさんよ！」

「しまった！」

トレインの体にヘイムダルの鎖がまるで生き物のように絡みついて
ゆく。

これでは逃げる事はおろか、銃を構えることさえできない。

「バルドル、でかしたぞ、これで彼はまな板の上の鯉同然、悲鳴を
上げて私に切り刻まれるしかない」

何、安心しろ、いきなり頸動脈や心臓は狙わないさ、まず、足
の腱を切り、次は腕を切断し、耳を削ぎ、眼球を潰してから、最後
にその心臓を抉り出してやる、貴様は裏切りものだ、楽には死なせん
大気を切り裂きマルスが一闪した。

「なんだ、さつきから地響きがしやがる、奴らこんな場所でロケットランチャーでもぶっ放してやがるのか？」

「ここは、1階のフロントである。」

クレシアに言われるがまま、下に下りてきてしまったが…

アントニーは異様な地響きと何かが破壊される音が止むことなく響く天井を睨みつけた。

「兄貴が心配だ、やっぱり俺は兄貴を助けに行くよ、お前だけ逃げるといい」

「馬鹿言わないで」

クレシアはアントニーの腕を掴んだ。

「せっかく、あの男が囷をかってでてくれたのよ？」

「しかし、兄貴を見捨てて逃げるなんて」

「わからない、あの男の正体は私達を殺しに来た殺し屋よ？どういう風の吹き回しか味方になってくれるけど、いずれは必ず本性を現すわ」

「そんな事、初めて会ったときからわかってたさ、けどな、俺は信じてえんだ、あの人の事を…」

「アントニー…」

「それに生まれてくる子供には父ちゃんは見捨てて生き延びた卑怯者だなんて言いたくねえ」

パチパチパチ

拍手がフロントに鳴り響く。

柱の影から太った男の姿が現れた。

「カルロス！」

「ククク、泣かせるね、友情の為、お腹の中のベビーの為に闘う男なんてなかなかの美談だぜ、だがな、ククク」

カルロスは下卑た笑みを浮かべ肩を震わせて笑う。

「そのガキはお前のガキじゃねえって言うのによお」

「黙れ、豚野郎、こいつは俺の子だ」

「お前が、ボスを殺した理由、それはボスがクレシアを監禁し無理やり犯したからだ、だがな、だが、それがもし、二人は愛し合っており、その行為そのものが合意の上でのことならば話はどうだ？」
「なっ」

アントニーはクレシアの顔を見つめた。

クレシアは唇を噛みながら涙を流し、ただ首を振っていた。

「まあ、もともと、エル・グラントは無類の女好き、若い頃は力づくで女を自分のものにしたという前科もあるし、最近、クレシアを見る眼が熱を帯びていたというのもお前は気づいていた、だから簡単に俺の口車に乗ったんだ、男の嫉妬は見苦しい、その言葉に尽きるぜ」

アントニー、愛しのクレシアをお探しかい

カルロス、どこにいるかしらねえか？

「はあ、お前にはショックだろうが、実はまた親父の病気が始まってな…」

「親父、俺は、あんたを、あんたを…すいません、すいません」

アントニーは頭を抱えて涙をボロボロと流す。

「レイプはしていない、すべて合意だ、クレシアが帰ってこなかったのはひとえに、熱を出してボスはそれを看病していたから、そしてクレシアが嘘をつくのは不倫を無かった事にする為だ、女というのはなんとも、信じがたい」

「うああああああ」

絶望しきったアントニーは叫び声を上げる。

「ごめんなさい、ごめんなさいごめんなさいごめんなさい、こんな事になるなんて思わなかったの！」

クレシアは謝りながらアントニーを抱きしめる。

「お、俺は親父を…、親父を…撃った、撃つちまった」

壊れたオルゴールのように同じ言葉を何度も何度も繰り返す。

「しかしよお、アントニー、そんなに気に病む事かよ、エル・グラントは世話になってきたレインフィールドさんを裏切ってあのクソ

ツタレのアル「コルテカにつこうとしていたんだ、死んで当然、殺されて当然なんだぜ、お前は俺の口車に乗って見事にその大役を果たしてくれた、礼を言うぜ」

「馬鹿野郎！」

アントニーはクレシアを払いのけると立ち上がる。

「あの人は常にこの国の事を、人々の生活の事を考えていた。エル「グラントを悪く言う奴はこの俺が、このイーグルアイがゆるさねエ、俺なりの筋を通させてもらうぜ、カルロス！」

アント二才、俺はアル「コルテカを支援して意向と思うんだ。

親父、馬鹿な、俺達は連中にこの国の麻薬組織を管理統治する為に、協力者として援助を受けて成長したんだ、それを断つたりしたら

外資系企業がこの国の経済を支配している以上、生産、精製、運搬、販売という仕事をもたらす麻薬ビジネスは民衆達の重大な食い扶持だ。

だから、クロノスも国際社会も批判こそすれど、その現実をどうする事もできない、秩序のために飢え死にしろとはいえないからだ。だから、外資系企業を支配するクロノスはこの国に一定の秩序を保つ為、麻薬組織スコープオに多額の援助を与え、国中の麻薬組織を取り締まらせた。

餅は餅屋、彼らは賄賂を受け取るような警察なんかよりも、よく働き、組織間の抗争の数を減らしたり、麻薬の生産量や輸出量も調整することに成功した。

しかし、それでも麻薬による抗争は絶えない。

スコープオに不満を持つ組織は年々増えてゆく一方である。

貧富の差がますます広がってゆく中で、力で押さえつけるにはもはや限界があった。

そこに出てきたのはアル「コルテカだった。

彼は、外資系企業から経済界を解放し、麻薬ビジネスを国の公認に

しようとした。

公認になり国で管理する事で、確実にこの麻薬結社同士の悲惨な抗争は止まる。

もちろん、その麻薬ビジネスだって、経済制裁が免除され、国が真の自由を得る事ができれば、皆、麻薬よりも儲かる仕事に就きたがるに決まっている。

アルカポネ達がいた禁酒法の時代に酒を売る事は犯罪行為だが、現在はそんな馬鹿な法律は無く酒の売り買いは自由である。

ならば一度麻薬の方も、一度、鎖を取っ払ってしまえば、この血で血を洗い、子供が毎年死んでゆく悲惨な現実が変わるのではないだろうか…

しかし、それに反対するのはやはりクロノスや国際社会だ

自分達を追い出しただけでも憎らしいのに、麻薬のようなものを公認するなんて正気の沙汰ではないし、国際社会の秩序が乱れる事になる。

そしてスコープオがアルカポネに手を貸せば、確実にクロノスはスコープオと手を切るだろう、いや、エルグラントが暗殺されるかもしれない、そういう例をいくつかアントニーとエルグラントは知っている。

すべては覚悟の上よ、俺はスラムの、麻薬組織の抗争が激しい町の生まれでな、ガキの頃から頭上に飛び交ってくる鉛の弾を気にしながら、文字通り這いつくばって生きてきた

エルグラントはコーヒーを一気に飲み干した。

彼は生来の下戸なのだ、酒は飲めず、コーヒーをいつも飲んでいて彼に酒を飲ませたら、あくる日までげー吐いていた姿をアントニーは思い出した。

上の兄達は、3人いたが、みんな、抗争に巻き込まれて死んだよ、2番目の兄なんか警官に麻薬の売人と間違われて、口にショットガンを突っ込まれて殺された、だが毎年、この国には、いや貧しい南米の国々ではまだまだ、こうした現実が残っている、若

いのが何も知らずに薬やって、何もわからずに銃で撃ち撃たれている、俺はそいつを何とかしてエ、そしてできるならばもう、こんな仕事をやめてえんだ

足を洗ったらどうするつもりですか？

ん、お前と一緒にコーヒーショップを開ければいいと思っている、小さいんじゃないぜ、コーヒー農園をいくつも持って、スタバみてえに規模が大きい奴よ

彼は子供のように笑っていた、そんなボスが、親父が好きだった。アントニーは銃を構えた。

白銀の銃が太陽に照らされて美しい光を放つ。

「抜けよ、猛牛の尖角と呼ばれた^{ハイン・ホーン}ためえの死に様、俺に見せてみる、一対一だ、邪魔は誰にもさせねえ」

「ククク、俺に勝つ気にいるのか？調子に乗るな、俺がためえに銃を教えたんだ、そんな俺にお前が、兄貴に弟が勝てるか」

「抜かねえなら俺から撃つちまうぜ、カルロスの兄貴よお」

「ぶっ殺してやる…！」

カラスの群れが一齐に廃墟から飛び立った。

ズドン！

銃声と同時にアントニーが跪く。

「アントニー！」

カルロスは硝煙を上げるトールスレイジングブルを構えてニヤリと笑い、そして倒れた。

額に銃痕がある。

即死だ。

「アントニー！」

クレシアは駆け寄った。

「大丈夫だ、クレシア」

アントニーはフラフラしながら立ち上がった。

しかし、銃弾が太ももを貫き血が流れている。

「しっかりして」

クレシアはスカートのすそを破るとアントニーの足に巻きつけた。

「ごめんなさい、私…」

アントニーは黙ってクレシアを抱き寄せた。

「いいんだ、もう過ぎた事だ」

それは悲しげでとても優しい笑顔だった。

「アントニー！」

クレシアは傷ついたアントニーの腕の中で子供のように泣きじゃくった。

倒れこむようにしてトレインは、足を狙ってきた克蘭ツの刃をスレスレでかわす。

「なっ」

まるでブレイクダンスを踊るように、頭を軸に円をかくような蹴りが克蘭ツの脇腹を強打した。

「ぐっ」

「こいつは、おまけだ」

トレインはスタングレネードを投げた。

トレインは既に鎖の束縛から解き放たれてその場から離れている。

「克蘭ツ！」

バルドルが叫んだ。

スタングレネードが爆発し強烈な爆音と閃光が周囲に広がる。

「へへ」

トレインはブランと垂れ下がる右腕を見た。

いわゆる縄抜けだ。

右腕の関節を外し、締め付ける鎖との間に隙間を作り離脱した。

そんな技術の訓練はしていない、今日初めて行った。

本能だ。

頭よりも早く体が動き、間接を外していた。

外し方はわかったが接ぎかたはわからない。

右腕はしばらく使えない。

だが奴よりかは幾分かマシ

閃光は盲目のクランツには何の意味を持たないが、問題はスタングレネードの放つ轟音が奴の聴覚を殺す。

聴覚を絶対の武器とし、同時に命綱にしている奴にとっては今、丸腰で戦場に立たされているようなものだ。

「終わりだ」

クランツに向けてハーデイスを発砲する。

目隠しされた達磨にかわせるはずが無い、死（DEAD）だ。

しかし、クランツは再び、マグナムを紙一重でかわした。

その口元には確かに笑みの形を作っていた。

氷の微笑、トレインはゾクリとしたものを背中に感じる。

ガチン！

目を狙ってきたマルスの一閃をハーデイスの銃身で受け止めた。

ギチギチギチギチ

ハーデイスとマルスの接合部分が金切り声のように鳴く。

「これで六発目、文字通り、打ち止めだ、つまりゲームオーバーというわけだ、ハートネット」

「馬鹿な」

「何故か、知りたいかね、君が驚くのも無理が無い、私が聴覚だけを頼りに闘っていると思っっている君が驚いても仕方がない、至極当然なことだ」

「なんだと、まさか」

トレインの額から汗粒が流れ落ちる。

「そう、人間の感覚を司る五感、そのうち視力を私は四年前、拷問により奪われた…、だがそれは覚醒だった、進化といってもいい、闇の世界の覚醒…、私は光を失ってから視力以外の感覚である聴覚、触覚、味覚、嗅覚、四つの感覚を人間の壁を超えた域にまで研ぎ澄ます事に成功したのだ、絶対四感、私はそう呼んでいる」

…絶対四感

奴は残された感覚を元に、全身で敵の位置や行動、心理状態を読む

事ができる。

つまり、聴覚が潰されたとしても後の触覚、味覚、嗅覚でトレインの行動を把握しているのだ。

嗅覚で臭いからトレインの位置を…

触覚で肌に感じる空気の流れからトレインの行動を…

味覚からトレインの汗、空気に溶けた血の味をそれぞれから得られる情報を感知、把握し、動きの先の先を読んでいる。

馬鹿な、人間どころか蛇のピット器官さえ越えているじゃねえか、こいつは、こいつは…！4年前の拷問で闇の世界に叩き込まれた時に、超えちまったんだ、捨てちまったんだ、人間って奴を…

「この化け物め」

「さて、君もスタングレネードという私が予想しなかった虎の子を見せたのだ、私も虎の子を見せるとしよう、軍神の真価をな」

クランツはマルスの柄についていたトリガーを引いた。

ヴヴヴヴヴヴヴ…！

異様な音を立ててマルスの刀身が超振動する。

そして信じがたいことが起こった。

ハーデイスのバレルに火花が走り、刃が飲み込まれてゆくのだ。

馬鹿な！核弾頭でも破壊できないオリハルコンだぞ！？

慌てて身を離れたが既に時遅く、ハーデイスは真つ二つに切断されていた。

「オリハルコンが切断されるのを見るのは初めてかな、マルスに切れぬ物はこの世に存在しない」

ブオン！

風を巻き込んで振るわれたヘイムダルがトレインの体を軽々と後ろへと弾き飛ばす。

「ぐおおおおお」

苦痛に声を上げてトレインは床に転がった。

「勝負あったな、銃が破壊されちゃ勝機はねえ、クランツ、ハートネットは俺が止めを刺す」

「フン、いいところりだな、バルドルよ、私はまだ指の一本も斬り落としていないぞ、まだまだ、久々の狩りを楽しみたい」

「お前はこれから遊ぶつもりだろうが、俺とハートネットとは長い付き合いだ、奴がお前に切り刻まれてゆくのは見るにたえねエ」

「情けか」

「違うね、俺の手で引導を渡してやりたいだけだ、おっ」

トレインはふらつきながら立ち上がるうとしていた。

床に血の痰を吐く。

今ので肋骨が折れた。

状況は最悪

だが、今、勝機が見えた。

奴らの攻撃は完璧

一人の攻撃が避けられればもう一人がすぐさま追撃する。

あの二人の動きがお互いの邪魔にならないのは、お互いの力量を信じ、そしてその動きを見切りあっているからだ。

そうでなければあんな鉄球とスレスレの位置で克蘭ツが俊敏に動き回れるはずが無い。

一見完璧な戦術だが、完璧なものほどほころびを見つければ脆く崩れてゆくものだ。

綻びは見つけた。だがその前に銃が壊された、とんだ皮肉だぜ
トレインは苦笑いを浮かべた。

バルドルが膨らませていたガム風船が割れた。

口元にくっついたガムをまた、口内に戻し、クチャクチャと噛み始める。

まだ、その目は諦めてねえか、てめえらしいな、だがよオ、ここからじゃあ逆転の勝機なんてどこにもねえし、与える気もさらさらねえぜ

バルドルは風車のようにグルン、グルンと鎖を回し、鉄球に遠心力をつける。

「一撃だ、一撃で頭を潰してやる、楽になれ、ハートネット」

「兄貴！」

クレシアの肩を借りながらアントニーが姿を現す。足を怪我しているようで、クレシアのスカートの切れ端で包帯代わりに止血を行っている。

鮮やかな黄色のスカートの切れ端が赤く染まり痛々しい。

トレインはアントニーの目を睨んだ。

その手には破壊されたハーデイスが握られている。

アントニーはそれだけですべてを理解した。

出会ってそんなに時間も経っていないというのに、彼は傷だらけのトレインが何を欲しているのか瞬時に理解できた。

「使ってくれ、トレイン」ハートネット！」

アントニーは自らの愛銃ルガーK P 9 0 D Cを投げた。

トレインは銃を掴むや否やクランツに向けて発砲しながら間合いを離す。

「小賢しい」

クランツはナイフで45ACP弾を叩き落とすと飛ぶようなスピードでトレインとの間合いを詰めてゆく。

「クランツ、そいつは俺の獲物だぜ！」

同時にヘイムダルが虚空を焼きながらクランツの動きを追いかける。狂犬と盲犬

二匹の線と線が今、重なり合った。

ここだ、ここがためえらの綻びだ。

トレインは引き金を引く。

クランツは自分に向けて発砲しようとするトレインの動きを感知し避けようとするが、スレスレに走るヘイムダルの存在が邪魔をするので、かわすことを諦めナイフでの防御を選ぶ。

マルスの刃の一点に集中して45口径ACP弾が間髪いれずに叩き込まれてゆく。

「くっ」

同一箇所にコンマの差で弾丸を叩き込まれた事により掛かった衝撃

でマルスが大きく弾かれてしまい、彼の体に45口径の銃弾が撃ちこまれた。

クランツは後ろに吹き飛び倒れ伏す。

「クランツ！」

トレインは動揺するバルドルに向けて発砲した。

バルドルの右腕が弾丸に撃ち抜かれ、彼はヘイムダルのグリップを落としてしまう。

トレインは銃をバルドルの頭に向けて構えた。

銃の状態を見て自嘲げに笑い、銃を下げた。

「やっぱり、オートマチックは信用ならねえ、いつも大事なところで俺を裏切りやがる」

銃はジャミングを起こしていた。

スライドが薬莢を噛み込んでしまい引き金を引いても動かない。

トレインの驚異的な速射は、発射と同時にスライドがブローバックし、撃鉄を起こし、次弾を薬室に送り込む動作をすべて自動で行うオートマチックのような銃では対応しきれず、ジャミングをすぐに引き起こしてしまうのだ。

「お互い、腕を怪我して、武器を失った、俺の考えている事わかるか？」

バルドルの言葉にトレインは頷いた。

二人の顔には不敵な笑みが浮かんでいる。

「ああ、ここから先は体と体のぶつかり合い、どちらかが死ぬか、両方が死ぬかのデスマッチがお好みだろ？」

「そうだ、初めて意見が合ったな」

「そりゃそうだ、俺もお前もどうしようもない戦闘狂だからな、バルドリアス」

「ハッ、そういうこった！」

二人は上着を脱ぎ捨て同時に走り出す。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおー！」

バルドルは思わずトレインから身を離す。

「はあはあ、ぺっ！」

トレインは食いちぎったバルドルの肉片を床に吐き捨てた。

あまりに壮絶な殺し合いにアントニーとクレシアは呆然としている。トレインとバルドルはあはあと肩で息をし、場違いに笑っていた。その笑みは、邪悪さのない無邪気な子供のような笑みだった、その笑みが意味するのは一つ、それは戦闘への歓喜：

「やるじゃねえか、ハートネット、こんなに楽しいのは久しぶりだぜ、高ぶりすぎてよ、あれが勃つてきやがった」

「フツ、そろそろこの馬鹿騒ぎを終わりにしねえか？俺もお前ももう限界だろ」

「ハッ、そうだな、パーティーの幕引きには盛大に、俺をさらに高ぶらせて、そして戦闘の快楽を思う存分に味あわせてくれ、ブラックキャット」

「ああ、いいぜ、思う存分食らわせてやる、味わえ、そして死ぬ、この大馬鹿野郎が！」

死（DEAD）

彼らが次にぶつかり合った時こそ、決定的な死が訪れる。

しかし、それこそが、死の間際スレスレの瞬間こそが、彼らはこの無明の檻から、体中に巻きつく鎖の束縛から解放される、そしてそこから生還するその快楽は麻薬に等しい、その境地に生きる彼らは、なんとも如何ともしがたい戦闘^{ウォーモンガー}狂だ。

二人の間に銀色の矢が突き刺さった。

「馬鹿騒ぎはそこまでだ、??、??、??」

エミリオ「ロウが？の刻印が刻まれた白銀の弓を持ってそこに立っていた。」

「…エミリオ「ロウか」

克蘭ツは立ち上がった。

撃たれた瞬間、体を捻って急所を外したのか

かなりの深手のはずなのにその表情には苦痛は無く涼しい顔をして

いる。

「君ほどの男が、随分、深手を負わされたようだね」

「放っておけ、何のようだ、君もハートネットの抹殺に参陣したのか？」

「違うさ、馬鹿騒ぎはそこまでだといったはずだ、セフィリアからの命令だ、??、??、そして??、??はただちに帰還せよ」

「待てよ、こいつはターゲットと一緒に逃亡を図った裏切り者だぜ？誰がどう考えたってここで処断するのが打倒だ」

「セフィリアはこう言った、アントニーとクレシア両名は組織の末端、クロノスの秘密が彼らから漏出する恐れはほとんど無いと考えてもいい、ゆえにこの暗殺指令は無効、トレイン＝ハートネットの今回の罪状も不問にする」

「納得できねえ、そんな馬鹿な話しがあるかよ、隊長がなんといおうが知ったこつちゃねえ、俺はハートネットをぶつ殺す、その邪魔をされてたまるか！」

「バルドル」

エミリオはアルテミスを構えた。

引かれた弓の弦がぎりぎりと、鳴く…

「これはお願いじゃない、我らが隊長からの命令だ、隊長の命令はクロノスの声であり絶対、それに背くのは組織に矢を射ることに等しい、決るぞ」

「ちっ」

セフィリアに背く事はクロノスに背く事

誰よりも組織の忠誠心に厚いバルドルにとって、それだけではできなかった。

渋々、握り締めた拳を下ろす。

「そうか、良かったな、アントニー、お前ら生きてこの国から出られる…ぜ」

アントニー達にそう告げるとトレインは糸が切れたマリオネットのように、その場に倒れ気を失った。

「馬鹿な」

まだ納得できないのはバルドルだった。

「いくらなんでも甘すぎる、本当にあのセフィリアがそんな事を言ったのか」

「ああ」

エミリオは頷いた。

「エミリオ」

それまで沈黙を保っていた克蘭ツが口を開く。

「本当にセフィリアがそうだったのだな」

「ああ」

エミリオは重々しく首を楯に振った。

「そうか、バルドル、帰るぞ、我々の仕事はこれで終わりだ」

「おい、いいのかよ」

「セフィリア、アークスの下した決定に我々が逆らえらとでも？後は彼女がすべてを終わらせる、だから我々はここまでだ」

「あつ」

その時、バルドルも気づいた。

この一見甘すぎる沙汰の中に隠された彼女の真意に…

そしてさらに再認識する。

あの女は恐ろしい女だと言つ事を…

一週間後

空港にアントニーとクレシアは来ていた。

アントニーは白いスーツをクレシアは黄色いワンピースを着ている。行く先はアメリカ、カリフォルニア州だ。

まだ、飛行機の登場時刻には時間がある。

「すまねえがクレシア、コーヒーを買ってきてくれねえか」

「わかったわ、微糖ね」

「ああ」

クレシアは言われるがまま、コーヒーを買いにいこうとする。

その顔には微笑が浮かんでくる。

もう、何も心配は要らない。

スコルピオの追っ手もない。

クロノスの殺し屋もない。

自分にはアントニーが、アントニーには自分がある。

これから行くカリフォルニアは自由と希望が満ち溢れている。

そこで小さい家を買って、彼と生まれてくる赤ちゃん、三人で幸せに暮らすのだ。

「クレシア」

アントニーに呼び止められてクレシアは振り返った。

「何？」

アントニーは笑顔浮かべている。

彼女の大好きな子供のようにあどけない笑顔。

「俺はお前を愛している、それはどんな事があったってかわらねえ」
クレシアはアントニーとエル・グラントを選べなかった。

その結果アントニーはエル・グラントを殺してしまった。

その結果がスコルピオに追われる結果になった。

災いの箱を空けたパンドラ並みに、誘惑に負け林檎を齧ったエヴァ並みに悪い女だと思う、ずるい女だと思う。

本来ならば彼のそばにはいけない女だと誰もが思うし、自分もそう思う。

だがアントニーはそれを許し、変わらぬ愛情を注いでくれるのだ。

そして自分も変わらぬ愛情を彼に対して持っている。

愛している (I Love You)

その言葉に疑いなど持てるわけが無い。

「私もよ、アントニー」

クレシアは駆けてゆく。

二人は抱き合い、熱いキスをかわした。

クレシアが少し離れた自販機まで向った後、アントニーは一人空港の窓に立った。

空には白い鳥が飛んでいた。

自由に舞う鳥は自由だ。

何者にも縛られず何者にも従わない。

人間は産まれ出でてから死ぬまでの間、終止、この地上と言つ檻の中にいる。

その事を深くわかっているからこそ、アントニーはそんな鳥達が好きだった。

思い出すのはあのトレイン「ハートネットの事だ。

あの日以来、あっていない。

傷だらけで意識が無かった彼はあの眼鏡の男に背負われて連れてゆかれた。

彼は殺し屋でありながら命がけで自分達を守ってくれた、なのに結局自分は彼に対して何のお礼もしてあげる事もできなかった。

兄貴と、初めて心からそう呼べる人物だった。

「…ハートネットの兄貴、あんたとはもっと早く、違った形で出会いたかった」

もう二度と会うことはできない。

結局、自分は自由になる事はできない。

エル「グラントを殺した罪からは逃れる事はできない。

「もういい、撃てよ」

アントニーがそうつぶやいた瞬間だった。

窓を貫いてアントニーの心臓に三本の矢が突き刺さった。

アントニーは後ろに仰け反る。

「アントニー！」

クレシアは缶コーヒーを落として倒れたアントニーに向けて駆けてゆく

「へへ、クレシア、ごめんな、守ってやるなんて、嘘ついて」

「アントニー、そんなそんな」

クレシアは泣きながらアントニーの顔を触るが、その顔からは既に血の気が引いている。

「…幸せに…なれ…」
聞き取れなかったが、それが彼の最後の言葉となった。

トレイン「ハートネットは自室のクローゼットにあったトランクを開いた。

トランクの中には使い込まれたS&WM29が入っていた。

トレインはその銃を取り出すとシリンダーをスイングアウトさせて、マグナムを一発一発詰めてゆく。

今朝、エミリオから報告が届いた。

アントニーを射殺したと。

涙は流さない。

死人に対する涙は無駄だからだ。

だが、死人に対して生者ができる事はたった一つだけある。

それは復讐

ホルスターにマグナムリボルバーをぶち込むとハンガーに掛かっていた革のジャケットを羽織った。

体が震える。

その震えの意味は武者震いなのか、怒りなのか、それとも恐怖なのかわからない。

復讐する相手はおそらく番人中目下最強の相手

??セフィリア「アークスだ。

黄昏時の港に赤いレクサスが止まっていた。

運転席からセフィリアが出てくる。

血のように赤くに染まる港にはトレインが一人立っていた。

「どうしたのですか、こんなところに呼び出して？」

トレインから放たれる静かな殺気と憎悪に気づいているはずなのに、あくまで、いつもと変わらない穏やかで丁寧な口調である。

「止してくれ、あんたみたいなのが、一番たちが悪い」

「ハートネット」

「エミリオがアントニーを殺したのは任務だからだ、それは仕方がない、俺が気に食わないのは、あんたのやり方だ。あんた、俺を騙しやがったな、騙してアントニーから引き離しやがったな」

「フッ」

セフィリアは笑った。

「それがそうしたというの？」

いつもと異なる強い口調だった。

押しつぶされるようなプレッシャーにトレインは唾を飲み込んだ。

「任務だから、彼を殺した。あんな事を言ったからって私が聖人君子にでも見えたのかしら？お前も私も所詮、ここより地獄がお似合いな人殺しの極悪人よ、そんな私がアントニーの暗殺を取りやめるとでも本気で思っていた？」

「うるさい、あんたは裏切った、俺の心を裏切ったんだ、俺はそれが許せねえ」

トレインは銃を引き抜いた。

「抜け、俺と勝負しろ」

次の瞬間、横方向から生まれた殺気を感じ取って、トレインはその場にしゃがんだ。

空を薙ぐ衝撃と共に頭の上に黒い刃が通り過ぎる。

「ベルゼー！あんたもいやがったのか」

「彼女を守る事も私の仕事の一つだからな」

ベルゼーは大剣ともいえる巨大な刃がついた黒い槍『グングニル』を構える。

「トレインハートネット、一つ尋ねる、セフィリアに銃を向けるなど正気か」

「正気さ、もちろん、正気と狂気の境にある極めてグレイ色の正気だがね」

「そうか、ならば、何も言わん、お前は私が斬り捨てる」

ベルゼーは槍を大きく振りかざし、トレインは銃の撃鉄を上げた。

「止しなさい、ベルゼー、手を出すな」

最後の瞬間にトレインにはそう認識した。

たとえ、十二人の番人全員で彼女に向っていったとしても彼女ならば、すべてを殺せる。

天才を超えた異才。

生まれながらの殺し屋。

一なるもの

守護天使、これが長老会の切り札、セフィリア・アークス

今の一撃で完全に脳震盪を起こしている。

指先一本動かすことさえ今のトレインには困難だった。

気を抜けば意識が手を放した風船のように彼方へと消えてゆきかねない。

死ぬ。

本能が告げる。

死神が、もうすぐ自分の肩を叩く。

いや、その死神というものは目の前にいる彼女に他ならない。

彼女はまさに避けられない死を擬人化したような存在だった。

「何故、あっさりお前を殺さず、回りくどい事をしてまでアントニ

ー達とお前を遠ざけたか…」

薄れゆく意識の中でセフィリアが語り出す。

「私はお前に興味がある。だからこそ騙してでも帰ってきてもらいたかった、メイソンが推薦し、時の数には存在しないナンバーである??を与えたお前にな、それは組織始まっての異例中の異例だ、だが今のお前はまだまだ未熟、正直、何故??のナンバーを与えたのか私にはわからない、私を殺したければさらに鍛錬を積み、甘さを捨てる、そして…」

「……?」

その時だった。

闇の消えてゆく黄昏の中セフィリアが優しく微笑んだ

その笑顔は穏やかでどこか悲しげに見えた。

「…私を殺してね」

それは聞き逃してしまつようなそよ風のようなささやきだった。そう聞こえた……ような気がした。セフィリアはトレインの頭に向つて右足を振り上げる。鼻柱が碎ける音と同時に、顔面に強い衝撃が走り、意識が一瞬で彼方へと吹き飛んだ。

目を開けると白い天井が見えた。

点滴がぶら下がっており、液がポタリポタリと一滴ずつ落ちてゆく。ベッドのそばには、心電図が波をたえず波を表している。

病院のベッドの中である事を寝ぼけたトレインが理解するのに、一分少々の時間が掛かった。

エミリオが椅子に腰を掛けながらゲーテの詩集を読んでいた。

「気がついたかい、ハートネット」

「ああ、俺はどれくらい眠っていたんだ？」

「丸三日だ、まったく、あのセフィリアと闘うなんて、君はどうかしているよ、とにかく命があつてよかった、水、飲むかい？」

トレインは頷いた。

エミリオはミネラルウォーターをコップに注ぎトレインに飲ませる。

「すまねえ」

「いいつて事さ」

トレインは再び天井を見上げるようにベッドに横になった。

「クレシアはカリフォルニアに渡つたよ、そこで小さなバーを経営して生まれてくるわが子と暮らすそうだ」

「……」

「デイビッドやジェノスも昨日見舞いに来たよ、その飾られている花やポテチ、ポルノ雑誌は彼らからだ。今日はナイザーが来る予定だよ、彼も君の事を心配しているようだった」

「……」

「アントニーの事は残念だった、実はあの後、隊長には内緒で僕は彼に会っているんだ」

「奴はなんて言っていた」

「彼は死を覚悟していた、ただ一つの望みはクレシアを無事アメリカに移住させること、それを僕に頼んだ、君への言付けも預かっている。『ありがとう、すいません』、そう伝えてくれって言われたよ」

「…出て行ってくれねえか、一人になりたい」

「ああ、また、来るよ」

「ああ」

トレインは枕に顔を伏せた。

俺が作った曲さ、曲名は『最愛の人クレシア』

兄貴として呼ばせてください

俺達二人が生きていれば、生きてこそいれば、どこでも生きる道は作れると俺は信じているんです

あのどこまでも純真な男の顔が浮かんでは消えてゆく。

トレインの瞳から熱いものが流れてきた。

それが涙というのに気づくのに時間が掛かった。

死者に流す涙はすっかり流しつくしたと思っていたから、自分でも何故今自分が泣いているのかわからない。

わからないがあふれ出る涙が止まらない。

止まらない

止まらない…

「…生きてりゃ、生きてこそいればどこにでも生きる道を作れるんじゃないかったのかよ、クロノスに命を狙われたくらいで、スコープオに追われたくらいで、親父を撃つくらいでなんだと言うんだよ、たとえ、どんなに浅ましくとも必死に喰らいついて生きてこそ人間だろうが…、クレシアは、お前の子供は、たとえ、命を狙われずとも、引き換えにお前が死んで幸せになれるって言うのかよ…！こ

の馬鹿野郎、死んで自由になったつもりか、そんなもん俺は認めねえぞ、絶対、許さねえ、うおおおおおおおおおおお！」
病院にトレインの叫びが木霊した。

上空に一羽の白い鳥が大空へと舞ってゆく。

鳥は自由、彼らに国境はない、しがらみが無い、人間が生きようとするたびに泥沼のように足元にまとわりついてくる、すべての苦痛から解放されている。

愛、金、職業、法律、社会、道徳、政治、文化：

地上に生きる人間が決して逃れることができないこの檻の外を彼らは生きることが出来る。

彼らには風に乗る翼がある。

人間には翼はおるか彼らが上空から落とす羽の一枚すら持っていない。

病院の駐車場でエミリオは舞い落ちてきた白い羽を拾った。

丁度、車から降りたナイザーが花束を持って歩いてくるところだった。

ESCAPE

〈 Good Bye White Bird 〉 < 後編 >

Fin

2010/05/19

後編（後書き）

・エミリオ

アニメでしか登場せず、しかも空気だったのでほとんどオリジナルです。

殺し屋集団なので、メンバーに狙撃手もいたら面白いと思い設定付けました。

・バルドル、クランツ

アニメは不遇、でも結構人気がある二人、原作ではなかった彼らのコンビネーションアタックを以前から書きたかったので書きました。バルドルは戦闘狂でクランツは殺人狂、拷問好きという設定です（何故）ナイフ使いは多かれ少なかれ切り裂きジャックなイメージ。

・セフィリア

バラライカとか草薙素子とかインテグラとか強い女性リーダーが好きなのでこうなりました。ですから女子高生とかもびしばし叩き斬ります。

気分はザ・ジヨイです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4940/>

ESCAPE Good Bye White Bird

2010年10月9日05時28分発行